

産民公学連携によるファッション文化の発信と地域文化の創造 —第21回国民文化祭・やまぐち2006

ファッションフェスティバルの実践的研究—

Dispatch of fashion culture and creation of local culture by cooperation with industry,
citizens, administration and academies

—A practical study about The Fashion Festival at The 21st National Culture Festival, Yamaguchi 2006—

研究代表：水谷由美子¹⁾

共同研究者：井生文隆²⁾・松尾量子³⁾・田中輝雄⁴⁾・岡部泰民⁵⁾
入江幸江⁶⁾・磯部素男⁷⁾・永富真子⁸⁾・神 大樹⁹⁾

1. はじめに

2006年11月3日～12日まで第21回国民文化祭・やまぐち2006が文化庁、山口県、山口県教育委員会、山口市、山口市教育委員会、第21回国民文化祭山口県実行委員会、第21回国民文化祭山口市実行委員会の主催により山口県下全域で開催された。本論は、上記国民文化祭におけるファッションフェスティバル分野について、その遂行された内容を記述するとともに、改めてそれぞれの表現活動についてその意義と成果を検証することを目的としている。

研究代表の筆者は、ファッションフェスティバル推進委員会委員長に2004年秋に任命され、おおよそ2年間に渡り、県、市、商工会議所、産業界そして教育界などから選ばれた委員とともに準備と実行に携わった。

ファッションフェスティバルのテーマはファッション推進委員会の中で議論した結果、「シュル・ジャポニスム宣言 — デニムファッション！世界を翔る —」になった。なぜなら、山口ではすでにジャパン・ファッションデザインコンテストin山口が2000年から開催されており、2001年からは継続してデニムをテーマにしたコンテストを実施して来た実績があり、全国の関係者に徐々に認知されてきていたからである。

さらに、山口では1999年から産官学連携事業「やまぐち文化発信ショップNaru Naxeva」や山口県立大学服飾研究会が、地域文化を発想源とするファッションショーを実施して、山口、大きくは日本文化をテーマとした服飾デザインの活動を継続的に行っていたから

である。

世界的にも1970年代以降、第2のジャポニスムの風がファッション界に吹いており、21世紀は益々世界のコレクションの模倣ではない、オリジナルなファッションを創造して行く時代となっている。

こうした理由で、すでにファッション界では使用されているネオ・ジャポニスムという言葉とは別に、従来のジャポニスムの流れをさらに越えて地方から世界にファッションを発信するという意味を込めて、シュル・ジャポニスムという造語を作り、テーマとしたのである。

2005年7月～11月にファッションフェスティバルのイベントを計画し、「講演会」、「第6回ジャパン・ファッションデザインコンテストin山口（高校生部門）」そして「街じゅうデニム — ファッション&アート —」を実施した。

特に、7月は、空間演出家でありアーティストとして活躍中の毛利臣男氏を招き、「街じゅうデニム—ファッション&アート」の企画に向けて「街は市民の劇場空間～商店街を創造しよう～」と題した講演会と「街を歩く」ワークショップを実施した。毛利氏は1970年代以来、世界のアートシーンにジャポニスムの風を吹かせて来た代表的なアーティストである。山口との縁は、2000年から開催されているジャパン・ファッションデザインコンテストin山口の審査委員長として活躍している点にある。

この企画は後の全体の企画にも大きな意義を持った。街を歩くワークショップでは学生の他に、商店街の店

1) 山口県立大学大学院国際文化学研究科教授
3) 山口県立大学生活科学部講師
5) 山口県繊維加工協同組合専務理事
7) 第21回国民文化祭山口市実行委員会事務局
9) 山口県立大学大学院国際文化学研究科1年

2) 山口県立大学大学院国際文化学研究科助教授
4) 第21回国民文化祭山口県実行委員会事務局長
6) 山口市議会議員
8) 有限会社ナルナセバ代表取締役

主も参加した。ある店主から街じゅうデニムを実施するアーケード街は、室町時代から市が立っていたことや萩往還と石州街道という二つの街道が重なる交通の要衝であったことが紹介された。

こうしたワークショップの結果を生かして、毛利氏が「商店街の歴史性を生かそう」、「商店街を劇場にしたい。みんなでわくわくする空間をつくろう」と呼びかけ、「山口県はデニム素材の工場が多く、世界中のデニムを集めたお城をつくったらどうか。そしてデニムファッションを山口から発信しては?!」とのアイデアを披露した。その結果、参加者に共通の問題意識と表現へのモチベーションが喚起されたのである。

このイベントの成果が、2006年の本番への大きな足がかりとなった。デニムを共通のテーマにしたファッションフェスティバルは、山口市を挙げてのプロジェクトになったと言える。そして1年間の準備期間を経て、産民公学の一大共同作業が実施された。

以上のような講演会とワークショップがきっかけとなり、その後のファッションフェスティバルの大きな計画の柱が築かれたのである。その主なる6つの柱は以下のとおりである。

- 1) 街じゅうデニム — ファッション&アート —
- 2) 「日本の祭り — 藍とデニム/伝統と現代 —」展
- 3) モーリ・マスク・ダンスPart12「BLUE MOON」
- 4) シンポジウム「シュル・ジャポニスム宣言—デニムファッション!世界を翔る—」
- 5) ファッションデザイン・コンテストUnder18
- 6) 第7回ジャパン・ファッションデザイン・コンテストin山口 (国民文化祭連携事業)

以下では上の6つの企画の柱に関する発想源や実施方法、そして実施結果を記述する。国民文化祭全体の特徴の中でのファッションフェスティバル分野の成果の客観的な評価を交えながら、事業全体を総括しつつ、将来に向けた文化による街の活性化に関する可能性を導くことが目的である。

産民公学連携という研究創作の性格上、以下での記述は主に運営に携わった共同研究者に語ってもらうことにする。研究代表者の筆者は、ファッションフェスティバル推進委員会委員長として、すべての事業に関わり、統括する立場にあったので、ここでも全体の編集・統括と主に担当した部分について記述する。特に、全般は第21回国民文化祭山口市実行委員会が担い、その事務局は山口市のスタッフによって運営された。それ故に、ファッションフェスティバルに関して山口市の中心的運営スタッフであった磯部素男が、「街じゅう

デニム — ファッション&アート —」の他にも筆者と共に本論の編集に携わっている。

今回はデニムがファッションフェスティバルの主役であるが、産業界とファッションフェスティバルを繋げたのはファッションフェスティバル推進副委員長で、ジャパン・ファッションデザインコンテストin山口実行委員長の岡部泰民である。岡部は主にファッションデザイン・コンテストUnder18について分析している。また、ファッションフェスティバル推進委員の一人である入江幸江は、街じゅうデニム — ファッション&アート — の担当委員として、市民参加の広がりを推進した立場からこの共同研究に参加した。

「日本の祭 — 藍とデニム/伝統と現代 —」展に関する空間構成デザインについてディレクションを担当した井生文隆助教授と展示計画を担当した松尾量子講師も、展示に関する計画とその結果などについて記述する。

また、芸術監督としてアーティスト毛利臣男氏を迎えて実施したモーリ・マスク・ダンスPart12「BLUE MOON」に関しては、ワークショップの企画・運営を担当した永富真子が主に記述する。また、永富とともに演出助手を担当した神大樹は出演者としての立場も踏まえて報告する。

第21回国民文化祭山口県実行委員会事務局長である田中輝雄には、第21回国民文化祭・やまぐちの2006企画意図と県から見たファッションフェスティバルの意義などを語ってもらったので、引用して本文に挿入している。

2. ファッションフェスティバルの概要

山口におけるファッションフェスティバルを企画するに当たり、すでに地域文化を発想源にするファッションショーが1996年から、そしてデニムをテーマにしたジャパン・ファッションデザインコンテストin山口が2000年から実施されており、産学公(官)の連携の余地があったことははじめに述べた。

そこで、国民文化祭を契機として、ファッションフェスティバルでは「シュル・ジャポニスム宣言 — デニムファッション!世界を翔る —」をテーマに、産民公学連携で、地域の専門家のみならず市民や学生さらには商店街の人々とともに企画・運営を進めた。さらに、空間演出家でありアーティストとして国内外で活躍中の毛利臣男氏を芸術監督に招き、全体への示唆を頂くとともに山口でのオリジナルパフォーマンスの創作を委嘱した。

全体テーマの背景となった考え方は以下のとおりである。

1970年代以降、日本人デザイナーやアーティストたちの欧米での活躍により、19世紀後半のジャポニスムとは異なるネオ・ジャポニスムの風が持続的に吹いている。特に21世紀から、日本は文化受容の時代から文化発信の時代へ確実に入ったと言える。

全体に使用される素材「デニム」は労働着からハイファッションまでをカバーする21世紀になくはならない象徴的素材であり、半世紀前に日本の藍の伝統とヨーロッパやアメリカ文化とが融合され、現在、質・量ともに世界一へと飛躍的に成長した日本を代表する素材である。

このファッションフェスティバルでは「ファッションデザイン・コンテストUnder18」や「日本の祭 — 藍とデニム／伝統と現代 —」展、さらに国民文化祭連携事業の「第7回ジャパン・ファッションデザインコンテストin山口」において、デニムを用いた全国規模のイベントを開催した。

また、ファッションショーをパフォーマンスという形に昇華させたモーリー・マスク・ダンスPart12「BLUE MOON」は、毛利臣男芸術監督と山口県民のコラボレーションにより、4月からマスク、衣裳、小道具などを造形するとともに、身体表現のワークショップを行って来た。本番ではゲストアーティストを招き、美しい映像と音楽が融合する中で、内外のプロとアマチュアがともに一つの舞台でパフォーマンスを展開した。観客は2回公演で800名を数え、しかも県内外からの多くの参加者を得た。

「街じゅうデニム — ファッション&アート —」では商店街を劇場に見立て、商店街の人々や学生そして老若男女に関わらず多くの一般市民が連携する下で、10種類以上の企画が実施された。デニム作品の展示やパフォーマンスを通じて、街のあちこちでファッションの創作の輪が波紋のように広がった。また、そこで歴史的な山口にも出会うことができた。

さらにこうしたイベントを通し、シンポジウムでは日本各地の伝統文化や物語をモードの中に織り交ぜながらも、既成概念を越えた新しい表現で、世界に発信しうるファッションの創造を目指すために、「シュル・ジャポニスム宣言」を行った。

これらの運営はファッションフェスティバル推進委員が中心となり、産民公学からの参加と協力により進められた。中でも市民的な広がりとなった街じゅうデニム — ファッション&アート — は、街なかで様々

なイベントを行うという企画の性質上、多くのスタッフや協力者が不可欠であった。そのため、2005年のプレイベントの時から運営スタッフの確保に努め、大学生（主に山口県立大学）や文化活動やまちづくり活動に積極的に関わっている人、そして一般市民の参加を促し、街じゅうデニムワーキンググループを結成した。

運営スタッフの主なメンバーたちは、それぞれの企画に重なって参加していたために、10日間の期間、毎日、本番を迎えるような忙しさの中で、睡眠不足を押しての運営となった。

しかし、多くの意義と将来への抱負を持った人が多く、推進委員長として終了後は胸をなで降ろしたのである。

3. ファッションフェスティバルの6つの企画と実施

以下では上で紹介した6つの企画について順次取り上げる。

1) 街じゅうデニム — ファッション&アート —

「街じゅうデニム — ファッション&アート —」（以下街じゅうデニムと記す）の実施日時は平成18年11月3日（金・祝）から5日（日）の3日間で、午前10時～午後5時の間に山口市中心商店街全域を舞台に繰り広げられた。

はじめに記したようにプレイベントで実施した毛利臣男氏によるワークショップで、商店街からの参加者が熱く山口の商店街が石州街道と萩往還が重なる場所で、非常に長い歴史があることを説明した。毛利氏はこの事実を踏まえて、参加者にいくつものヒントを与えた。

その結果、後に産民公学を集めたワークショップで、参加者の共通認識が歴史性を企画に取り込もうということになった。結果としてこうした歴史的な流れを背景にして、商店街を古代、中世、現代、未来のエリアに分け、デニムを使った作品や衣裳でそれぞれの時代を表現することになった。

街じゅうデニムの運営母体となったワーキンググループは、プレイベントに関わったスタッフを中心に商店街やメディアーターなどにも参加を呼びかけて充実していった。メディアーターとは、地域の活動と学生による活動の橋渡しを目的として2004年に山口で発足した組織で、山口大学、山口県立大学、山口芸術短期大学の学生が運営を行っている。街じゅうデニムの開催期間にはデニム人間として延べ120人が参加したほか、本番前にも作品展示のための作業などで人手不足を補

う大活躍を見せてくれた。

ワーキンググループの組織は、主に造形と空間演出をするデコレーション部会、音楽やダンスなどのパフォーマンス部会、そして多くの市民が街じゅうデニムに参加できる企画・運営を行う市民参加部会の3部会に分かれた。それぞれの部会にリーダーを置き、リーダー会議で決定した後にワーキンググループの全体会議において議題等を提案する形をとった。

こうした多くのスタッフに恵まれて、本番では3日間に延べ266人の運営スタッフが街じゅうデニムに参加し、準備期間や作品制作者を含めると全体で約1000名が関わる市民参加イベントとなっていた。

また、期間中に商店街を訪れ、街じゅうデニムを見た人は約4万人に上った。この事業を今後も街じゅうデニムというイベントとして少しずつバージョンアップしながら、継続していきたいと思ったのは我々スタッフだけではないはずである。すべての人はアーティストであると言うことができる。山口の多くの市民や商店街の人々は、普段眠っていた表現者としての潜在能力を開花させて、商店街を自由なアート空間に変貌させたのである。

①商店街の参加について

今回、街じゅうデニムの開催によって、筆者の積年の思いが実現する糸口ができた。というのは、1995年に山口の中心商店街に「魔法の屋根」と愛称が付けられた球体型アーケードの落成イベントを米屋町と道場門前の両商店街から依頼されて、一緒に実施した。それ以来、筆者の活動に商店街の協力を得て実施された幾つものイベントがあるが、それは言葉どおり共同で実施というよりも協力の域を越えていなかったという経緯がある。

山口市のアーケード街を形成している中心商店街は、一般には「道門」と呼ぶ人が多くいるが、実際には7つの商店街に分かれている。今回はそのほとんどの商店街がデニムによる造形と商店街の装飾を行うということで国民文化祭に参加してくれたのである。それは、画期的と言わざるを得ない結果である。なぜなら、筆者の商店街における活動以上に、各商店街の代表者たちの言において、いつも協調性がなく、ばらばらだということを聞いていたからである。

今回はこうして各商店街が国民文化祭に参加してくれた理由として、何よりも推進委員やワーキンググループのスタッフの構成が、はじめから産民公学の構造を持っており、商店街の代表者がワーキンググループのメンバーに加わっていたことが挙げられる。街じゅう

デニムのコンセプトや内容がその代表者をとおして各商店街に説明され国民文化祭と商店街をつなぐ大きな役割を果たしてくれたのである。

また商店街や市民に関心を持たせる仕掛けも有効だった。その一つが「フォト&デニムコンテスト」のチラシである。それは、プロカメラマンが商店街各店自慢のデニムファッションを撮影し、その写真をチラシに掲載するというもので、話題性のある企画であったことから報道各社が競って取材をしたことも効を奏して、広く店主たちに街じゅうデニムへの関心を喚起したのである。

そして前述のワーキンググループのメンバーの店主が、提供されたデニムで店の装飾をしたことが商店街の参加を決定的なものとした。この店主の活動をさらに広げるため、各店独自のアイデアでデニム素材を用いたサインや装飾等を作ってもらよう各商店街に依頼して回った。徐々にではあったが、自発的に参加する店が増えて来て、本番1ヶ月をきる頃には、ほとんどの店舗が街じゅうデニムに参加し、商店街ごとにテーマを持った取り組みが実現するという幸福な結果となった。

スタッフは参加店を増やす事とデニム素材を届けることでまずは役目を終えた。後はどんな形で各店舗が表現するかを待った。本番を迎えるまでは正直どのようなものが出来上がるのか不安はあったが、実際の出来具合を見て実に驚かされた。ある文房具屋では大きなデニムノート、タバコ屋ではのれんにパイプの絵、そして楽器店ではデニムのギターが制作されていた。このギターが凝っていた。すばらしい出来ばえなので、誰が制作したのかをその店舗で尋ねた。すると「めんどくさいなと思いつきながら取り掛かったら面白くなり、凝りに凝ってしまいました」と制作した従業員さんが嬉しそうに答えた。

各店舗それぞれにアイディアがあり、こんなところにもあんなところにもデニムが形になっているという状態であった。商店にデニム作品が飾られブティックのマネキンにはデニムの商品が展示され街じゅうがデニムで溢れ、実に感動的なシーンが商店街に出現した。

見て歩くだけでも楽しい、またお店の方の苦勞話を聞くのも嬉しい、というように街は市民劇場という当初のコンセプトは具体化したのである。

こうして、各商店街の自発的な創作によって、大輪の花を咲かすように、まさに街じゅうがデニムに染まったのである。

②商店街の取り組み

ここで、商店街の取り組みの一部を紹介したい。上述したデニムを使った店名の表示サインや装飾等を行う企画はサイン&デニムと名付け、特に駅通り、米屋町、中市町、大市町においてその取り組みが顕著となり、デニムを使った楽しい展示企画として「街じゅう」と呼ぶにふさわしいイベントとなった。

西門前(山口市本町)商店街では商店街の柱につける街じゅうデニムの旗や風船を使ったオブジェを制作(参加者：藤井道子、境千帆、吉川雅依)したほか、期間中のデザイン画展示パネルの出し入れ等の協力を受けた。道場門前商店街ではどうもん広場の借り上げやデニムの小物(ポケットティッシュケース)の制作等が特徴的である。また、この商店街が独自に企画して「デニムdeどうもん」(デニム衣服のデザインコンテスト：後述)を実施した。米屋町商店街では休憩所の提供(株式会社藤本)を受けたり、イベントステージ(みずほ銀行前)とアーケード展示用バーの借用などの協力を得た。中市商店街にはNacの使用に便宜を図ってもらった。新町商店街には市内の幼稚園・保育園の協力を得てタペストリー(キッズ&デニム)が飾られた。この他デニムを使ったさまざまなオブジェが新町商店街の通りを飾った。

それではこれから、街じゅうデニムの活動について一つずつ触れる。

③コサージュ&デニム

2005年のプレイベントで展示用に作成されたコサージュが、非常に評判となった。本番ではこのコサージュを街を訪れた人に配ったり、一緒に作ったりといったコミュニケーションツールとして活用しようという意図で、「コサージュ&デニム」が企画された。

コサージュの制作目標数が3000個に設定され、制作を市民に協力してもらおうということになった。運営スタッフである推進委員の働きかけで、市内大内地区の老人会の代表者の集会で講習会を開き、協力を呼びかけたところ、10を超える老人会から参加の意思表示があり、これがきっかけでここから市民参加の輪が広がっていった。このことについては後でもう少し詳細に触れることにする。

まず、進め方は先方の希望する日時と場所でコサージュ制作講習会を開催し、制作方法の指導を行った。その後、10月までを目途に各老人会やグループで独自に制作に取り組んでもらった。講習会は山口県立大学のサークル innerspace LAB (インナースペース・ラボ)のメンバーに講師をお願いし、市の事務局スタッフが一緒に同行する形をとった。

コサージュ&デニムにおいて、多くの市民の参加が得られた理由に、協力者の多くの人に国民文化祭という大きなイベントに参加したいという思いがあり、街じゅうデニムがその参加の機会を提供する場になったことが挙げられる。また、参加の方法についても、活動が負担とならないように、日程や場所などを参加しやすい仕組みとしたことも大きく影響した。

最終的にはコサージュの制作に23の団体(個人を含む)の参加があり、目標の3000個を容易に超えるコサージュができあがった。目標数を達成したことと制作の予算がぎりぎりであったため、その後も協力したいという問い合わせもあったが、別のイベントに協力をお願いするなどして制作を断るほどの人気となった。

できあがったコサージュの使い方については、当初街にこられた人にプレゼントするという進めていた。しかしながら、せっかく多くの方の協力で作られたものなので、たくさんの人に見てもらおうという意見が出て、急遽、道場門前商店街にある店舗を借りて作品展示も行った。

展示については、スタッフとして参加したメディアーターの大学生が中心となって進めた。しかし、展示する案が初めにはなかったことから、作業が10月以降となり、十分な期間がとれなかったことで、展示の責任者だったメディアーターや多くのスタッフに余分な負担をかけてしまったこと、展示についても、もっと市民の協力が得られるはずであったことが悔やまれ反省点である。

参加個人・団体：大内老人クラブ(氷上長寿会、若葉会、茅野神田福寿会、茅野神田なごみの会、大道いきいきサロン、上矢田慶寿会、中矢田栄光会、下矢田きらきら会、新矢田新生クラブ、高芝西寿会、高芝東寿会)、大歳福祉の輪づくり運動の会(お花づくりの会)、高井きらく会、大歳公民館有志の会、大歳はつらつクラブ、大歳なすの会、中矢原あつまろう会、今井上福寿会いきいきクラブ、山口県児童センター母親クラブ、荻原文子、おとめの会(生協共同購入グループ)、徳地ボランティアグループハンドフレンド、山口市婦人会小郡支部、innerspace LAB、地域活動おたすけターミナルメディアーター

④「コサージュ&デニム」への老人会の参加に至る経緯とその後の経過

ここでもう少し、詳細にコサージュ&デニムに老人会が参加した経緯とその結果について、街じゅうデニム担当委員の入江幸江の発言に触れてみる。

「街じゅうデニムのイベントのひとつであるコサージュ

&デニムで『デニムのコサージュを作ろう』の企画は昨年の国民文化祭イベントでのワークショップから生まれ、コサージュが流行していた事もあり、たくさんの方の体験者で賑わいました。

それ故に、本番でも是非ともコサージュ作りを生かしたいと、推進委員会で大きな柱にしようとするべく決定されました。ワーキンググループで協議をして行く経過において、コサージュを街行く人にプレゼントしたらどうかという案が大学生のインナースペース・ラボからあり、その数の提案は3000個でした。

簡単な作り方とはいえ半端ではない数なので制作者探しに、私が一役かう事になりました。国民文化祭に関心を持ってもらいたい、参加したい人をひとりでも多く集めたいとの思いで、私は自分の近所に住んでいる大内老人クラブ連合会の副会長にこのプロジェクトについての説明をし、協力をお願いしました。この副会長に国民文化祭への理解を深めてもらうきっかけを作ることができたのは、コサージュ制作の説明をしたラボの代表で、男子学生でした。『男子がコサージュを指導?!』私は副会長さんが驚かれたことは今も鮮明に覚えています。そしてその時、コサージュを制作していただくというこの計画は絶対うまくいくに違いないとの確信を得ました。それは、副会長さんの顔がとても嬉しそうだった事と、老人クラブの方々が若い学生さんの指導と一緒にコサージュを作る事が新鮮な体験になると信じたからです。大内地区には22の老人クラブがありますが半数の11地区から制作希望があり、案の定、ラボのメンバーと老人会のほほえましい指導制作交流会の様子が伝わってきました。大内地区だけにどまらず市内にも活動を広げ、瞬く間に予定の3000個が出来上がりました。計画から実行まで約4ヶ月というスピードには驚きました。この様子がケーブルテレビでも放送され、各地区の盛り上がりの様子が広く市民にも伝えられ参加された方々の喜びもひとしおではなかったかと察します。老人クラブ等の皆さんの手により仕上がったコサージュをどのように陳列するか、どのように配布したらよいかとのアイデアはメディアエーターとして参加した女子学生の出番でした。立地条件の良い空き店舗を使わせていただけたことも幸運でしたが、彼女たちのひたむきな姿、そして真剣な眼差し。こつこつと取り組む姿には感動を覚えました。そして彼女たち自らもコサージュを作ってみたい気持ちになった様です。展示会場でワークショップを開催して、デニムのコサージュの制作の楽しさを広めました。大勢の方がコサージュ&デニムに関わることができた事、

また国民文化祭開催中にコサージュを手に入れる為に足を運ばれた市民の皆様本当にありがとうございました。いろんな嬉しさが混ざりあったコサージュ&デニムでした。』

⑤水墨画&デニム

水墨画&デニムは、デニムの表面を薄く削り落とすことによってイラストや文字を彫刻する技法(サンドブラスト)があることをヒントに企画されたものである。

雪舟の山水長巻を題材とした。なぜならちょうど2006年は雪舟没後500年という記念の年に当たり、山口県立美術館でも同時期に「雪舟への旅」が開催されることが決まっていたために、地域の事業と連動して話題性を持たせることができるからであった。もちろん、水墨画が墨による濃淡の表現であることから、サンドペーパーで削ることでデニムに容易に濃淡の表現をすることが可能でもある。そこで、デニムを用いた作品の規格をデニム生地縦1.5メートル、幅2メートルとし、山水長巻を分割して、その図柄を拡大して作品を制作することにした。

制作については、下絵を生地に写し取り、微妙な濃淡の表現を考えながらの削り作業となることから、市内の高等学校4校の美術部と市内の2大学の美術専攻学生に制作を依頼し、合計8作品を構想した。その他にもデニムエッチングを行うプロの作家の協力を得て商店街有志で1枚を作成し、最終的に合計9枚の山水長巻の模写を制作した。

これらの作品の裏はデニムの白っぽい裏地が見えて存在感がないので、作品の裏に市内の子ども会に依頼した作品(デニム de やまぐち)を縫い合わせた。

作品は米屋町商店街と道場門前商店街の交差点(魔法の屋根下)から中市商店街方面にかけてアーケードの天井の12本のバーを使用して展示した。

制作期間が約2ヶ月という短い期間だったが、いずれも見応えのある作品となり大変好評を博し、展示期間も当初の10日間から約1ヶ月間(11月末まで)に延長した。

イベントを進めるにあたっては、秋の行事が控える中で、大変な作業を快く引き受けてくださった各学校の先生や学生のみなさん、エッチング工房り・あーとさんの技術指導、アーケードのバーの上げ下ろしを何度もしていただいた米屋町商店街振興組合など、多くの人の協力によって実現したイベントとして印象深いものとなった。

参加個人・団体：山口中央高等学校(美術部)、山口高

等学校（美術部）、西京高等学校（美術部）、中村女子高等学校（美術部）、山口大学教育学部（美術教育）、山口芸術短期大学デザインアート学科（絵画部・専攻科芸術文化専攻）、エッチング工房り・あーと、寺田多恵子、入江幸江、中村好文、末永光正、平田隆之、野稻絵美、豊川智恵、藤井和佳子

⑥デニムdeやまぐち

水墨画&デニムで述べたように、山水長巻の作品と同サイズのデニム生地（縦1.5メートル、幅2メートル）にポスターカラー等で色をつけたり、布を貼ったり自由な方法で作品をつくる企画である。

制作については、6月に開催された山口市子供会育成連絡協議会会長会議において各地区の子ども会に依頼し、12地区の子ども会から参加協力を得た。

作品の制作にあたっては、参加者は主に夏休みの期間中に制作を行った。それぞれの地域の特徴ある風景や行事、特産物などバラエティに富んだモチーフを描いた作品ができあがった。

参加をした子ども会の責任者から、「この活動を通じて国民文化祭に少しでも関わることができたこと、子供達が創作活動に共同で取り組むという体験ができたことなど、参加できてよかった」という感想を受けた。参加団体：仁保地区子ども会、小鯖地区子ども会、大内地区子ども会、宮野地区子ども会、大殿地区子ども会&大殿中学校美術部、西糸米子ども会、湯田地区子ども会、吉敷地区子ども会、平川地区子ども会、大歳地区子ども会、名田島地区子ども会、二島地区子ども会

⑦フォト&デニム

より多くの人に街じゅうデニムのイベントに参加してもらう機会を提供するために、手軽に参加できるフォトコンテストとして企画したのがフォト&デニムである。

経費をかけずにより効果的な告知をする方法として、6月10日にどうもん広場にて、ブティックの店員のデニムファッションを撮影する写真撮影会を開催し、マスコミに取り上げてもらうことでPRを行った。

作品の応募は18作品と結果的には少なかったが、11月3（金・祝）～5日（日）のどうもん広場での展示（人気投票）では、デニムで作成した小物（ポケットティッシュケース）のプレゼントもあり、人気投票者数は、実に407人にもものぼった。この人気投票で、大賞1点、入賞10点を決定した。

このイベントをPRするために開催した写真撮影会は、地元ケーブルテレビがその様子を取り上げてくれ

たこともあり、多くの人にイベントを知ってもらえかけとなった。また、各商店街から合わせて22店舗が参加してくれたことなど、商店街に対する街じゅうデニムの周知が進んだことと、初めて商店街の協力が具体的に得られたイベントとして印象深い。

参加団体：capriccio, Wicked, mambo, lody, クルバス, klog', Magasin + 12, スタームーン, PLUS ALPHA, F・O・B STORE, F・O・B IMPORT MIX, Hallow's Hallow's, anp, ブティック YVE, FAN2, ふあっしょん倶楽部, 贈り物工房 亜呂麻, 亜呂麻 姉妹店ねね, Anna Kerry, (株)ちまきや, Mr. YVE, COSMO21, ONE BY ONE., 有限会社ピッピー, HIT CREATIVE OFFICE, SARA, コーヒーボーイ山口店, 匠山泊, メトロ文化（進藤）, 明治堂（松原）, 井ビシ眼鏡店（坪井）

⑧デニムロード

デニムロードは、デニムを使って制作したオブジェをアーケードに設置して、山口の時間の流れ（歴史）を表現したもの。デザイン、制作とも山口県立大学 innerspace LAB（インナースペース・ラボ）が受け持った。

時間の流れと商店街の関連づけは、古代（中市商店街）→中世（米屋町商店街）→現代・未来（道場門前商店街・西門前商店街）とした。

オブジェは、3つの時代において、その時代を象徴する意匠をこらしたオブジェを種、蕾、木という形で制作し、アーケード内の各エリアに設置した。古代は、火をモチーフに種、蕾で文化の始まりを表現、中世は、石畳をモチーフに種、蕾で文化の広がり表現、現代・未来は、古代と中世の文化を取り入れた上での未来への自己発信の木とした。

参加団体：innerspace LAB, 田村石材工業所

⑨ゲート&デニム

ゲート&デニムは、街じゅうデニムのエリアの境界をオブジェで表現したもの。

当初、駅通り一新町の南北ラインと、中市一西門前の東西ラインのそれぞれ両側に象徴的にオブジェを設置する案で進んでいたが、最終的には東西ラインのみとなり、中市商店街のアーケードの端に1箇所、道場門前商店街のトラヤ跡の交差点の地点に1箇所設置した。

オブジェについては、高さ2.5メートルの支柱に風船（バルーン）を巻き付けたもの2対を門（ゲート）に見立て、そこに門番（デニム人間）をつける形とした。

設置場所がエリアの境界になっていなかったこと、

街じゅうデニムという表記がなくオブジェ自体が門というイメージでなかったことで、企画の意図が明確に表現できなかった。

⑩パフォーマンス&デニム

街じゅうデニムの企画の切り口としてワーキンググループ内で決定されたコンセプト「城（静）と祭り（動）」の内、「祭（動）」に基づいて企画したもの。パフォーマンスを組み込むことで、祭のにぎわいを演出した。また、出演者もデニム人間と位置づけてできる限りデニム人間の衣裳を着てもらった。

また、直前に全体の企画を見直した際に、前年のイベントと比較して当日参加型のイベントが少なかったことから、デニムエッチング体験とコサージュ&デニム制作体験を組み入れた。

各イベントの説明は以下のとおりである。

- ・FOLLIBA（フォリバ）

西アフリカの伝統楽器ジェンベのリズムに合わせて歌やダンスを披露。

- ・moor（軽音楽）

スコットランドやアイスランドの匂いを感じさせる楽曲群に様々な要素を織りこんだサウンドを披露。

- ・colorful（山口県立大学ダンス部）

様々なジャンルの踊りを披露。

- ・奄美連合萩組（山口県立大学よさこいサークル）

春と夏、二つの季節をテーマにしたよさこいを披露。

- ・Miki（二胡奏者）

中国の民族楽器二胡による演奏。イベントの最後には、二胡の演奏をバックに参加者が山口市の歌を大合唱した。

- ・雪舟ミニレクチャー

今年が雪舟没後500年の年にあたることから街じゅうデニムでも水墨画&デニムの企画と連動して、雪舟の水墨画ミニレクチャーを開催した。講師は防府市の毛利博物館の柴原直樹学芸員。水墨画の説明だけでなく、雪舟と山口との関わりなども言及した。

- ・デニムエッチング体験

水墨画&デニムと連動した企画。プロによるデニムエッチングの作品展示のほか、サンドペーパーやサンドブラスターを使用してコースターに画を彫ってもらった。講師は水墨画&デニムで協力をいただいた「エッチング工房り・あーと」小山氏。

- ・コサージュ&デニム制作体験

期間中、道場門前のTショップを借り上げて店舗内においてコサージュの展示をおこなうとともに制作の

体験コーナーを設けた。制作指導には、メディエーターがあたった。

パフォーマンス&デニムでは、もう少し出演者との協議の時間が取れば、ステージ上でのパフォーマンスだけでなく、さらにオリジナリティあふれるおもしろい企画ができたかもしれないことが残念だった。

参加個人・団体：FOLLIBA, moor, Miki, 奄美連合萩組, colorful, 柴原直樹(毛利博物館), 小山祐和(エッチング工房り・あーと), yamaguchi art network, 吉村隆行

⑪デニム人間

デニム人間は、イベントの時に出了たアイデアで、街なかにデニムの衣裳を付けた人間（デニム人間）を出現させ、デニムファッションとともに、様々なパフォーマンスで街なかを盛り上げる企画である。

イベントでは、デニム人間の衣裳デザインについて明確なコンセプトがなかったが、今回は、商店街（アーケード）の各エリアで時（歴史）の流れを表現したことに合わせて、デニム人間も「古代」、「中世」、「現代・未来」と歴史を表す衣裳とした。

衣裳デザインは山口県立大学 innerspace LAB（インナースペース・ラボ）が受け持ち、制作も同じくラボが中心となり大内の中村地区の老人クラブ、山口市シルバー人材センター、良城小PTAコーラスのお母さん方の協力を得て進めていった。

古代の衣裳は、弥生時代の貫頭衣をモチーフに、玄武・青竜・朱雀・白虎の四神獣やシャーマンのほか、古代人の衣裳が制作された。中世の衣裳は、陣羽織を原型にして、大内やサビエルなど、山口の特徴を表現した飾り付けを施した衣裳、そして現代・未来は、人間と科学、自然との共存を表現した衣裳が制作された。

本番の3日間は、ボランティアスタッフや市の職員、パフォーマー（パフォーマンス出演者）など総勢100名がデニム人間として街なかに繰り出して、音楽やダンスといったパフォーマンスのほか、街を訪れた人にコサージュのプレゼントや、チラシを配布するなど多様に活動を行った。

参加個人・団体：innerspace LAB, ひだまりサロン(大内地区中村町内会), 山口市シルバー人材センター, 良城小PTAコーラス, yamaguchi art network, 片山恵美子

⑫キッズ&デニム

ファッションフェスティバル推進委員会企画の街じゅうデニムに連動して、新町商店街が独自に計画して実施した企画。

市内の幼稚園児・保育園児総勢約400人がデニム片に絵を描き、タペストリーとして新町商店街の通りを飾った。

参加団体：愛児園乳児保育所、大内幼稚園、嘉川保育園、亀山幼稚園、野田学園幼稚園、東山幼稚園、山口保育園の園児のみなさん

⑬ちょうちん飾り

山口のちょうちん祭りは中世室町時代に大内氏の第26代盛見が父母の冥福を祈るために笹竹の上に高燈籠を灯したのがはじまりと伝えられている。青森のねぶた、秋田の竿灯と並んで、日本三大火祭りの一つに数えられるこの祭りを、国民文化祭を機会に全国にアピールする意図で山口観光コンベンション協会、道場門前商店街振興組合そして山口駅通商店会と共同で取り組み企画したものである。

場所は道場門前商店街の遠藤中央薬局から近江屋まで、アーケード両側に合わせて20本の竹を設置し、それぞれ約50個のちょうちんをくりつけた。本数も少なく夜間の点灯は行わなかったが、この祭りの幻想的な雰囲気は醸し出すことができた。

商店街において山口の時間の流れ（歴史）を表現するという中では、はずせない企画ではあったが、デニムとの関連付けがなく、またお祭り自体の説明もなかったことなど、反省点もある。

⑭メッセージ&デニム

街じゅうデニムに関わってもらった作品の制作者や運営スタッフ等がデニムの生地（25センチ×25センチ）に手形や名前、メッセージを書き、それらを貼り合わせることで、多くの手が視覚化される。街じゅうデニムはたくさんの人の「手」によって成り立っているというメッセージを伝えるものになるという企画である。

手形が描かれデニム片は、最終的に約1000枚作成され、1000人のメッセージが発信された。この手形の展示については、10月に入ってメディアーターの大学生が中心となってアイデア出しとパネルの制作作業を行った。

展示場所については、道場門前商店街と西門前商店街をつなぐ場所として、安部橋（道場門前）隣の丸忠跡地を借用し、段ボールを使って制作したパネルに手形を貼り出して展示を行った。また、観覧者にも手形を書いてもらえるようコーナーを設置し、多くの参加を得た。

⑮デザイン画展示

ファッションフェスティバルのイベントのひとつ「ファッションデザイン・コンテスト Under18」に応募

のあったデザイン画（全国27都道府県796点）の中から、惜しくも最終審査に進めなかったがコンテスト審査員から評価のあった作品50点（県内17作品、県外33作品）を、西門前商店街において展示した。

多くの柱となるイベントがあったファッションフェスティバルだったが、それぞれのイベントを連携させることで相乗効果をあげることができないかという中で企画されたものである。

多くのファッションに興味のある若者達の取り組みを今回のように街なかにおいて紹介するような機会があれば、若者の創作へのモチベーションを一層高めるとともに、山口市のファッション文化への取り組みを強烈にアピールする場にもなり、今後も継続されるファッションコンテストとの連携をもっと図ってみる事が考えられる。

⑯街じゅうデニム協力・運営団体

全般協力機関：山口市商店街連合会、大市商店街振興組合、中市商店街振興組合、米屋町商店会、山口道場門前商店街振興組合、山口市本町商店街振興組合、新町商店街振興組合、山口駅通商店会、(株)藤本、どうもん広場、中市コミュニティホールNac、さぼらんで、みずほ銀行、山口商工会議所、国民文化祭実行委員会、地域活動おたすけターミナルメディエーター (MEDIATOR)

デニム提供：ブルーウエイ (株)、カイハラ (株)、倉敷紡績 (株)、日清紡績 (株)

主な協力教育機関：山口県立大学

イベント企画運営：第21回国民文化祭山口市実行委員会ファッションフェスティバル推進委員会、街じゅうデニムワーキンググループ

⑰商店街を舞台とした関連事業

・デニム d e どうもん・デザインコンテスト

道場門前商店街の企画。ジージャンやジーンズにデザインした作品を一般から募集。11月3～5日に道場門前アーケード通路に作品を展示し、人気投票によって最優秀賞（1名）と入賞（9名）を決定した。

街じゅうデニムとは、直接的な連携はなかったが、街じゅうをデニムでいっぱいにするというテーマの中で非常に効果的な企画となった。

・山口商店街お宝展

山口市商店街連合会の企画で、11月1日～30日の1ヶ月間にわたり、商店街各店舗（20店舗）自慢の品の展示と、商店街の今昔・あゆみなどを紹介した。

・サビエル生誕500年記念創作菓子の販売

11月3日（金・祝）パフォーマンス&デニムの会場

であるみずほ銀行前にて、山口調理師専門学校がサビエル生誕500年を記念して作った創作菓子の販売を行った。あわせて、ナバラ州司法大臣を招いての創作菓子の試食と大臣から学校への感謝状の贈呈も行われた。

また、学校の先生や生徒さんにもデニム人間になってもらい一緒にイベントを盛り上げてもらった。

・山口名物料理 秋のしっちゃん鍋

国民文化祭に来られた方へのおもてなしを目的に民間で組織された国民文化祭歓迎実行委員会の企画。

国民文化祭初日の11月3日にNacにて山口の食材を使ったオリジナルの鍋（しっちゃん鍋）を300食限定で作成好評を博した。

Nacの展示ホールで開催した「日本の祭」への流れを作る上でも一役買った企画となった。

2) 「日本の祭 — 藍とデニム／伝統と現代 —」展

「日本の祭 — 藍とデニム／伝統と現代 —」展は11月3日～5日の3日間、中市商店街にある中市コミュニティホールNacにて、「街じゅうデニム — ファッション&アート —」のイベントの一環の事業として開催されたものである。

ここでは、日本のデニム産業が日本の伝統的な藍文化から発展し、この30年間に躍進的な成長を遂げたことに注目し、デニム製造3大企業のパネル等、山口の3Bと言われるジーンズメーカーの作品、山口の藍染作品を展覧し、藍染織とデニムの関わりが理解されるような企画とした。

さらに、全国各地の祭りを着想源に、全国の服飾・デザイン系の専門学校や大学等が制作したデニムの創作法被22作品とゲストデザイナー1名の作品を展示したものである。

法被文化はヨサコイの全国的な広がりの中、ルネサンスを迎えている。各地の祭文化を織り込んだユニークな法被は、新しい全国の祭のシーンを彩る提案となった。

①展示内容

Part1 創作デニム：法被で表す日本の祭 参加校(者)

<ゲストデザイナー> 毛利 臣男(アーティスト)

九州・沖縄地区：専修学校インターナショナルデザインアカデミー(沖縄) 香蘭ファッションデザイン専門学校(福岡) ヒロ・デザイン専門学校(熊本)

中国地区：山口県立大学・下関文化産業専門学校(山口) 石田あさきトータルファッション専門学校 広島ファッション専門学校(広島) 中国デザイン専門学校(岡山)

関西地区：大阪樟蔭女子大学(大阪) 大阪成蹊大学芸術学部・京都造形芸術大学(京都) 神戸ファッション専門学校(兵庫) 滋賀県立大学(滋賀)

中京地区：愛知文化服装専門学校(愛知)

関東地区：昭和女子大学・杉野学園ドレスメーカー学院・文化服装学院(東京)

北陸地区：金沢美術工芸大学(石川) 国際トータルファッション専門学校(新潟) 福井文化服装学院(福井)

東北・北海道地区：国際ビューティファッション専門学校(福島) 北海道ドレスメーカー学院(北海道)

上記の「Part1 創作デニム：法被で表す日本の祭」は、2007年1月6日～2月27日まで神戸ファッション美術館の協力により巡回展が実施された。また、続いて2007年3月に島根県芸術文化センター「グラントワ」内いわみ芸術劇場のロビー空間において展示されることが決まっている。

その後、全国の他の地域でも機会を得て展覧会を継続して実施する予定である。

全国の専門学校や大学に依頼して制作された作品は、それぞれの地域の祭りに因んでそれに相応しい染織や造形そしてモチーフなどが表現されていた。観客の感想を聞くと、「法被」と聞いて固定観念で考えていたけれども、こんなユニークな法被表現もあるのですね。」という声を聞いた。

地域の伝統文化を踏まえた新しい表現を目指すという一歩としては、当初の目的を果たした企画であったと考える。

Part2 藍とデニム—企業紹介展示—

今回の山口におけるファッションフェスティバルにおいてデニムをテーマにしたのは、はじめに述べたように、ジャパン・ファッションデザインコンテストin山口において、2001年からデニムをテーマにしていたことに関係している。これは、カイハラ株式会社、倉敷紡績株式会社そして日清紡績株式会社のデニムの提供があって成り立って来た企画である。

今回、街じゅうデニムをはじめすべてのファッションフェスティバルの事業では、膨大なデニム生地を使用することができた。それは上記三社と山口市内にあるジーンズメーカー、ブルーウエイ株式会社の提供があったからである。

そこで、上記の日本のデニム製造企業三社に参加を要請した。ここでは、それぞれの企業が独自のとらえ方でブース展示を実施したので、非常に興味深いコー

ナーが生まれた。カイハラ株式会社は備後緋の製造からインドネシアの織物の製造などを経て、現在デニム専門の製造会社として世界でも質量ともに群を抜く有名な企業となっている。筆者は2度に渡り工場見学で、綿から始まりデニム製品に至る行程を案内され、圧倒されたのである。

貝原歴史資料館には、多くの備後緋の見本や独自に開発された織機が展示されている。これらの多くの資料から選ばれて今回は、備後緋から現在のデニム製造に至る歴史を感じさせる資料を展示した。

以下はカイハラ株式会社が展覧会で紹介した企業紹介からの引用である。

「カイハラ（株）は1893年（明治26年）に創業し、本藍染備後緋の製造を始めた。

1970年（昭和45年）に自社で開発・製作したロープ染色機で、日本初の本格的デニムの生産をスタートした。

ジーンズは、国境・性別・年齢・季節等に関係なく世界で着用されている衣料である。現在カイハラ（株）は、デニムに最適な綿花を輸入し、紡績・藍染・織布・整理加工の一貫メーカーとして、国内外のジーンズメーカー（EDWIN・LEVIS・ブルーウェイ・GAP・セブン・シチズン・AG・ディーゼル等）に販売しており「カイハラ」という名前が行き届いている。

世界で常にトップランナーをキープし続ける為に、新商品開発と品質安定をモットーに革新化を推進している。」

次に、倉敷紡績株式会社は、日本で最初のデニム製造会社である。今回の展示では、デニム生地に柿渋、合成の藍そして本藍などで布地を染めた法被を展示した。それらの法被の背には、会社の古いロゴと現在のロゴとを染め分けたものが表現されていた。会社の粋な計らいと作品に感動させられた。以下で、企業紹介を記しておく。

「日本のデニムは品質において今や世界一にまでなってきたが、今日に至るまでには良質にこだわり続けた、クラボウの歴史があります。

クラボウは、1970年代前半にデニム生地の生産を開始し、国産初の本格的デニム、KDシリーズを発売しました。そして1980年代前半には、古きよき時代のクラシックデニムを再現する為、今や世界の中心素材にまでなったムラ糸を開発し、アンティークデニムとして世界に発信した。また近年は「粗野でありながら、きれい」そんな矛盾したコンセプトを持つ、クリアスカイを発表し世界から賞賛の声を浴びています。

この国民文化祭では、日本古来の伝統にこだわり和の心をふんだんに取り入れた法被を作製し、デニムのクラボウとはまた違う『和』のクラボウを感じていただければ幸いです。」

最後に、日清紡績株式会社は藍の伝統文化と非常に縁の深い、布団大の筒描作品をした。以下では企業紹介を記しておく。

「日清紡のデニムは、日本の藍の故郷である徳島に生産子会社、日清デニムで作られます。その開発品はデニムの王道を堅持しながらも「ファッション」として何か新しい要素を追求し続け、これまで“高・中白デニム”、“ソフトデニム”等の新商品を上市してきました。中でも“液安デニム”は、質量ともに世界No1を自負する液体アンモニア加工設備を有する日清紡だからこそ可能となった商品です。その味わい深い風合いと性能は他の追随を許しません。

また、最近ではバナナ繊維デニムがバナナの廃棄物「茎」を再利用して紡績した糸から作られたユニークなエコロジー素材として国内外の注目を集めています。」

Part3 山口発！ デニムファッション

ジャパン・ファッションデザインコンテストin山口を中心に運営している山口県繊維加工協同組合に属するジーンズメーカーは、西日本の3Bと呼ばれるボブソン株式会社、ビッグジョン株式会社そしてブルーウェイ株式会社である。匠山泊は上記組合の活動から生まれて来た山口オリジナルジーンズブランドである。

今回は、この4ブランドのジーンズとデニムおよびパネルの展示を行った。

以下では、四社の企業展示のパネルの内容を紹介する。

「ボブソン株式会社

当社の提供している物は、ジーンズという素敵なファッションライフを提供するためのアイテムです。

ボブソンのフィールドはそのアイテム作りをファッション文化の創造という高いレベルまでもちあげチャレンジ精神と情熱を生み出す源泉となっています。

個性的なおしゃれを楽しむ女性達のニーズに応えるバラエティ豊かなボブソンレディースの商品展開はここから始まっています。」

「ビッグジョン株式会社

当社は1960年代初頭より国産のオリジナルジーンズの生産を始めて以来、国産ジーンズメーカーのパイオニアとして数々の商品を世に送り出してきました。「ベルボトムジーンズ」や「スリムジーンズ」などの新しいスタイル、「ビッグウォッシング」をはじめとする

「ファクトリーウォッシュ」などの洗い加工の様々なバリエーションがそれにあたります。

最近では、レディースの『BRAPPERS』ブランドから「新美脚 JEANS」を発売して、よりキレイになりたいという女性のニーズに応え、現在もさらに進化した美脚ジーンズを提案し続けています。メンズの基幹ブランド『BIG JOHN』も、よりスタイリッシュでカッコよく穿けるジーンズ「ラムダステッチ」を発売したところです。

これからは、確かな技術の裏付けをベースにさらに豊かなジーンズライフを提供すべく、ファッション面での提案を強めてゆくつもりです。」

「ブルーウエイ株式会社

1949年にブルーウエイは、藍染めの「備後絨」の産地で、今もジーンズ・アパレルの会社や紡績会社、洗い加工会社が多く集まる三備地区（岡山県と広島県の境一帯の地域）と呼ばれる場所に創設されました。中古衣類をヒントにネルシャツやペインターパンツを国産で初めて販売するなど、「Vintage」に対する思い入れが強く、加えて、世界で最高の技術を持つとされる日本の紡績工場、洗い加工会社と提携して、最新テクノロジーが施された素材に、手作業の職人的洗い加工を施すなど、こだわりの日本のオリジナル・ジーンズを開発しています。」

「匠山泊

匠山泊は、トータル・メイドインジャパンによる、世界最高品質の素材、加工技術を結集した、精神感性度の高いファッションを提案します。

匠山泊は日本の感性表現と表現加工技術を商品化するために、日本中から選抜された「もの作り」のサムライ達のプロジェクト・チームです。

世界には、多様な文化が存在します。その存在と個性を認め尊重しあって共生することが大切です。

匠山泊は世界の個性を尊重すると同時に、日本の個性を大切にファッションを通して、相互理解を深め世界平和に貢献したいと考えています。」

Part4 山口の藍と染展示

ここでは山口における藍と染に関して、自閉症の子供のための教育の手法として取組んでいる『ワークショップ・ひらき』代表平尾初江による展示を実施した。平尾の長女に自閉症という障害があり、昭和58年に保護者有志がひらきの里設立準備会を設立し、平成3年にひらきの里をオープンした。平成9年に保護者有志がひらきの里私設応援団『ワークショップ・ひらき』を立ち上げ、ひらきの里の利用者が「できる」作業を模

索し、藍染を始める。藍を苗から育て藍染をする過程には、植え付け、刈り取り、摘み取り、絞りなど利用者が「できる」作業が発生する。藍を育てることから染めることまでを1年間の生活サイクルの一部として取り組んでいる。そのプロセスや作品などを展示した。

②参加スタッフ

今回の展示に関するスタッフ構成は以下のとおりである。

企画：水谷 由美子 岡部 泰民

空間構成：井生 文隆

展示計画：松尾 量子

企画協力：神戸ファッション美術館

協力：中市コミュニティホールNac

宙の星こども未来園園長 秋枝芳男

運営：有限会社ナルナセバ

③作品募集方法

展示計画の松尾に、Part1創作デニムで各学校に依頼した方法や展示に至る経緯を語ってもらう。

「日本各地の大学及び専門学校、計22校に、その地域を代表する祭を選び、デニムの法被に表現してもらうというもので、主催者側が法被サイズ（図1参照）を指定し、制作に必要なデニム生地と補助材料費等としての経費5,000円を提供するという形で制作依頼をした。併せて展覧会終了後には全作品を写真撮影したDVDを参加各校に送付するという条件である。またファッションフェスティバルの芸術監督毛利臣男氏にゲスト参加していただいた。

各学校に対する制作依頼文書発送後、各校からの回答を待って、8月中旬に希望に応じたデニム素材の送付を行った。デニムについては、必要量の生地あるいは規定サイズに裁断済みのキットのどちらかを希望に応じて送付した。プログラムについては、9月下旬の法被のデザイン画提出後に準備を始めた。法被作品は、10月下旬に事務局あてに送付（送料主催者負担）してもらい、展示準備を行った。送られてきた法被作品は、それぞれの祭を表現するために、デニム素材を自在に加工したり、地域の特色を示す素材が組み合わせられたりすることによって、法被という決められた形にもかかわらず、かなり創造性の高いものであった。」

展示に関する空間構成デザインについては、担当者の井生に語ってもらう。

④「日本の祭 — 藍とデニム／伝統と現代 —」展における空間構成デザイン

・デザインコンセプト

テーマである「日本の祭り — 藍とデニム／伝統と現

代一」を具現化すべく、デニムが持つイメージと日本の祭りの雰囲気醸し出すような空間の演出を行う。中市コミュニティホールNacの展示会場を4つのゾーンにより構成し、会場の玄関からデニムの展示を透し、祭りの様子をうかがえるという会場のレイアウトとし、来客者を祭りとしてデニムの世界にいざなうデザインとしている。(図2)

・空間構成

Part1 創作デニム：法被で表す日本の祭り

全国各地の祭りを着想源に、全国の服飾・デザイン系の専門学校や大学等が制作したデニム法被22作品とゲストデザイナー1名の作品を展示している。竹と米松合板による法被のディスプレイは、祭りの御輿を担ぐイメージからインスパイアされたデザインである。またゲスト作家の作品を会場玄関から視線を呼び込む位置に展示し注目度をアップさせる演出とする。更に、日本全国各地の祭りのポスターを張り付けた1メートル幅の透明なプラスチックのネットを5枚、天井から吊し、祭りの雰囲気を盛り上げる演出も行う。(写真25・写真26)

part2 藍とデニム—企業紹介展示—

デニム素材の企業3社の紹介をパネルで展示する。(写真29)

part3 山口発！デニムファッション

デニムファッション4社の展示を行う。洗練されたデザインのジーンズを原点であるワーキングイメージの中で際立たせることを意図し、工場によく使われているパレットの上にディスプレイする。(写真28)

Part4 山口の藍と染め展示

山口において、藍と染めに関して活動しているグループの成果を展示する。

・空間構成

ディレクション：井生文隆

具体化デザイン：プロダクトデザイン研究室

法被ディスプレイ（デザイン・制作）：平川和明・中谷昭子

3) モーリ・マスク・ダンスPart12「BLUE MOON」

①企画・制作・衣裳監督の立場から

毛利臣男氏にはイベントの街じゅうデニムの講師として来て頂いた経緯がある。毛利氏はスーパー歌舞伎や国内外のオペラ、バレエ等の美術・衣裳デザインを手掛けるなど幅広く活躍しているアーティストである。ファッションにおいてはISSEY MIYAKEのパリコレクションのアートディレクターとして20年に渡り活

躍した空間演出家でもある。特に、約20年ほど前からモーリ・マスク・ダンスというシリーズの仮面舞踏劇を創作し、脚本、演出、振付、美術、衣裳などを手掛けて来た。筆者は、すでに創作された11回の作品の内3回をオリジナルで、そして他のほとんどの作品をビデオで見る機会を得た。

最初にビデオで見たのは1993年であった。その時に「服飾の表現を純粋に推し進めて行くところなる」というような感想をもった。つまり、服と身体そして空間とが具象的ではない、ある物語を綴って行く、そして非常に象徴的な表現を生み出す。服はその時に、音楽や空間そして人間の動きとともに総合的な表現を成り立たせる一部として機能するとともに、ある自立的な存在としての位置を明らかにするのだ。長年、毛利氏がパリコレクションのアートディレクターをして来て、より表現の領域を突き進めた時に生まれてきたのが、このモーリ・マスク・ダンスだと考えられる。

ファッションスティバルと言うとき、一般には日常的な服がイメージされ、パフォーマンス的な表現は舞台芸術だと思われがちである。それ故に、マスコミは記事にするのに、ファッションとしてどのように理解するかむつかしいという感想が持たれた。

しかしながら、服は一方でビジネスの対象であり日常生活に属するものだが、他方ではアートの対象であり、日常の生活を含め人間の内面を表現する身近なアートのメディアでもあるのだ。

現代はビジネスとアートの両者の融合した地点で、最先端のファッションの状況が生まれてきている。それ故に、筆者はファッションフェスティバルでは、ビジネスとアートの幅を揺れるファッションの世界を、多様に表現することが大切だと考えた結果、アパレルを対象とするデザイナーの登竜門としての機能を持たされたファッションデザインコンテストのみならず服飾の表現を純粋に推し進め、総合的な表現の中で服を考えることを目的とする仮面舞踏劇を実施したのである。

実施のスケジュールは、2005年12月に委員会で実施が認められ、1月から計画を立てた。ワークショップを通じて、毛利氏とともに創作するという方法を考え、毛利氏もその我々の考えを快く受入れた。3月初旬にワークショップ参加者を募集し、4月初旬に説明会を開催した。学校などが春休みの時期で、説明会の参加者が少なかったことは残念であった。しかし、この時に参加したメンバーはワークショップでも主要な役を果たすことになり、それは幸運なことであった。

結果的には山口の大学生と高校生、一般市民そして演劇や舞踊の訓練を受けている人たち約40名、さらにゲスト・アーティストに我妻マリ女史、金大偉氏が参加して、毛利臣男氏およびその他スタッフたちとのコラボレーションが実現したのだ。毛利氏は長年「コラボレーション美学」という言葉をキーワードにして、老若男女とプロやアマを問わない人々とともに共同で創作する活動をして来ている。「コラボレーション美学」に関する詳細な記述については、拙著『毛利臣男の劇的空間—舞台・ファッション・アート—』に1章を設けて述べているので、参考にされたい。

今回は10代から50代の男女が毛利氏のワークショップに集まった。ワークショップの構成は仮面や衣裳そして舞台装置などを造形するパートと、身体表現のパートに分かれていた。「BLUE MOON」を企画・制作するに当たり、毛利氏の脚本を読むと、人間の根源的な喜怒哀楽が現代的な問題意識を踏まえた中で、抽象的に描かれていた。そして、そこでは人間の魂の純粋さや身体の喜びが表現されていた。

特に灯籠流しの場面で使用される灯籠を制作する紙にもある種の意味を込めたいと考えた。そこで、山口県立大学付属地域共生センターで萩の竹から竹紙を制作する研究をしている石川正一氏に相談し、萩竹紙の会の皆さんにA4サイズの紙を漉いてもらいそれを使用した。

衣裳については、最初に1場の平和な広場から始まったのだが、ここでは白い仮面を被った老若男女を表現することになった。そこで、毛利氏から生成のシーティングでいくつかの造形的な特徴のシャツを作るという提案が出た。そこで、学生と共にいろいろな布造形の実験をして、「皺」「つまむ」「タック」「立体」「シャーリング」の表現方をスタイルとして選んだ。

そしてワークショップにおいては、参加者を任意グループに分けて取り組んでもらった。この造形のきっかけが、1場での世界5カ国の人々のグループ分けになって、ユニークな歩き方から舞台が始まったのである。

次に2場は灯籠流しの悲しみの表現があり、後半は希望のダンスの場面であった。ここでは、デニムのシャツを制作し、表面に各自好きな造形をしてもらい、また華やかに装飾してもらおうということになった。参加者はデニムに特有の表情の出し方である色落ちや端をもげもげにしたり、ビーズやリボンあるいはその他の装飾品を付けて、自由に工夫していた。

しかし、後半に出場しなかった人は、暗闇の灯籠流しの場面では自分たちが制作した衣裳があまり見られ

ないということで、フィナーレではこの衣裳が着られることになった。希望の場面では、デニムのシャツとジーンズというスタイルに加えてチュールのスカートがはかれた。そして手には鮮やかな黄色の布が持たれて、鮮やかな対照をなし、美しかった。

3場は夢の中がテーマになっていて、毛利氏からトルコの舞踊のイメージという提案が出た。上は1場のシャツを着て、ジーンズの上に巨大なサーキュラスカートを履くことになった。そこで、出演者全員のほぼ足首までであるサーキュラーを作成するのは、参加者に難しいということもあるが、準備するスタッフの物理的な環境もあり、ブルーウエイ株式会社に制作を依頼した。この上にいろいろな布で装飾したいという毛利氏の意見があり、筆者は「それでは皆の思いでの布をその上に付けることにしたらどうか」と提案した。

そしてワークショップで自分の思いでのシャツなど服を持って来てもらい、それを一定の大きさに切って、皆に配布した。最終的には仮面の色とデニムサーキュラスカートの上に装飾布との色をコーディネートすることになり、カラフルな布なども交えられた。さらに、回転した時にもっと効果的に魅力を出すために、リボンで装飾を追加した。

最後に出演者がみな回転する場面は圧巻であった。

ゲスト出演者の映像・音楽を担当してくれた金大偉氏の衣裳は皺加工をした足首までであるロングシャツにした。そして、我妻マリ女史は1場では旅人であったので、デニムのトレンチコートを制作することになった。我妻女史からいろいろなトレンチコートの資料を提供してもらった。そこで、トレンド過ぎないが、すこし今風を感じさせるトレンチコートを制作することになった。

3場では白の女神の役だった。そこで、毛利氏の非常にボリュームとマッサがあるイメージが提案されたので、スカートは他の出演者と同様に白のサーキュラスカートにして、その上に幅が異なるフリルを大胆に交差させる装飾をした。ブラウスは、同じくフリルを袖口と胸元に大きく表現した。

我妻女史は長年、ファッションモデルをすると同時に舞台のパフォーマーとしても活躍して来たので、そこに立っているだけでも存在感がある。演出意図を飲み込み、舞台全体のムードを引っ張った。彼女の演技を、トレンチコート姿と白の上下ドレスが邪魔をすることなく、むしろ役に立てたことは幸いであった。

金氏と我妻女史の仮面は毛利氏が自ら作成した。ワークショップでデモンストレーションとして作成したの

だが、紙のベースにシーチングや白の布を貼るという簡単な技法にもかかわらず、すばらしい仮面が出来上がった。仮面に精神性が宿り、気品さえ表現されていた。

この仮面舞踏劇では、言語が使用されない。舞台は3面が白のプリーツが寄せられたスクリーンが作られ、そこに金氏が作成した映像が編集され随時流された。それも具象的なものではない。音楽もナシ族の人々の歌や音楽を金氏がワールドミュージック風に編集したものである。音楽、映像、照明、そして仮面や衣裳と人物の動きが総合化された舞台が誕生し、そこで観客は物語を超えてイメージを味わうのである。

衣裳はそこでは映像とは別に、人物に抽象的なイメージを与えているが、観客はそこに表わされた抽象的な美によって、何か具体的なものを読み取ることを拒まれるのである。こうして、純粹にイメージの中で観客は知的な読解作業を拒否され、ただ感じる存在となる。そこから、初めて感じることから純粹にパフォーマンスの意図が紡ぎ出されてくるのである。

足下はデニムの足袋という指定があり、皆オリジナルに作成された。パフォーマンスでは畦道ダンスと命名された不思議な踊りや世界5カ国の人々の歩きなどが振り付けられた。それらは日常的のようで日常的でない動きで、従来のモダン・ダンスの型を超えたもので、かつ能のような象徴的なものでもない。ある意味、非常に新しい何かを感じさせられるものであった。

毛利氏が金氏のトンパ音楽を採用された意図は、トンパに日本の音楽の源流を感じさせるものがあるからというものだった。確かに何かつかしい印象を与える音楽で、自然と日本の故郷、人間の気持ちの原点に返るような効果を感じたのである。

出演者の中にはパフォーマンスが初めての人が半分強おり、仮面を付けているので非常に足下が悪くなる。リハーサルでは、誰かが動きがそろわなかったり、少しずれた動きをすることがあった。そんな時、毛利氏は「絶対そろわないといけないと思わなくていい」と言う。

毛利氏が目指しているのは、今までの舞台の表現が完全なプランニングで管理されていることにあたかも反旗を翻すことなのかとも思った。それは舞台という人々の目が集中力をもって向けられる緊迫した世界である中で、表現において完全であることは何か、そして人物表現のぶれの許される範囲はどれくらいかなどと考えさせられた。

こうした課題は新しい表現を生み出して行く、一つ

の糸口であるかもしれない。

「BLUE MOON」は本山口公演のために書き下ろされたオリジナル作品で、デニムというファッションフェスティバルのテーマに関連して毛利氏が創作したものである。このような舞台空間、ダンス、音楽、映像などが融合する美しい舞台を生み出す仮面舞踏劇は山口では初公演となり、2回の公演はそれぞれ立ち見が出たほどである。約800名の観客が楽しみ、時に笑いそして時に涙を流したのである。

舞台となった山口情報芸術センターのスタジオAで公演するに当たり、当初は不安もあった。しかし、最後の1週間のリハーサルできっとすばらしいものになると確信することができた。そして当日の見事にすばらしい舞台を見て、約11ヶ月の準備期間での苦労も一瞬に吹き飛んだのである。

それでは、以下でワークショップの詳細な過程やその内容については永富が記すので、そこに譲ることにする。ただ、筆者の立場で述べたいのは、限られた時間に設定されるワークショップの課題は、経験者でも簡単ではないものを、未経験者もすることでかなりの準備と後のフォローが必要であった。その苦労はすべて永富が請け負ったという点である。彼女の努力と成果をこの場をお借りして讃えたいと思う。

②ワークショップ企画・運営の立場から

今年11月に開催された第21回国民文化祭・やまぐち2006ファッションフェスティバルにおいて、山口県立大学大学院発ベンチャー企業である有限会社ナルナセバは、3事業に携わり、多くの成果を得ることができた。

その一つ、「モーリ・マスク・ダンス」は、美術監督、衣裳デザイナーとして世界的に活躍し、その斬新な空間作りでも高い評価を得ている、毛利臣男氏が芸術監督を務める仮面舞踏劇である。これまで公演された「モーリ・マスク・ダンス」の出演者は、プロの舞踊家、プロモデルまたは芸術や服飾を学ぶ学生が主であった。公演12回目を迎える今回、毛利氏によって書き下ろされた脚本「BLUE MOON」を基に国民文化祭ファッションフェスティバル内の企画として、山口在住の一般市民へ参加を募った。

参加者は公演までのワークショップを通し、各自着用するマスク・衣裳等を制作から身体表現まで、通常の舞台作りでは区別して進行される作業の殆どを体験していく。

筆者は有限会社ナルナセバとして、そのワークショップの企画からマスク・衣裳・小道具制作、ダンスレック

スのワークショップ運営を担った。

8ヶ月間に渡るワークショップの中で参加者は創作、ダンスを通し様々な表現を行う。日常接するジャンルとは異なるものに挑戦し、さまざまな壁に衝突することで、時には表現に行き詰まり、葛藤が起きる。しかし、自己表現や物作りを追求していくことで、さらなる自己を発見することができる。この性別、年齢、国籍、プロ、アマチュアを問わず創造の刺激や感動を享受し、融合する「コラボレーション美学」という概念を毛利氏は提唱してきた。

ここでは、ワークショップを通して市民と毛利氏との「コラボレーション美学」の内容と成果をワークショップの企画・運営の立場から述べる。

モーリ・マスク・ダンスに関するワークショップは一ヶ月に一度、毛利氏を東京から招聘し行われた。以下には、各ワークショップの日時、内容について述べる。

下記14回のワークショップ以外に、ワークショップの日程で参加出来なかった者、制作が間に合わなかった者を対象としてワークショップ補講を行った。それらを含めると計30回以上のワークショップでこの舞台が作られていたと言える。

ここではワークショップの参加者について述べる。ワークショップ参加は4月1日に行われた「モーリ・マスク・ダンス」ワークショップ参加を募る毛利臣男氏の公開説明会及び、募集要項を配布することによって募集を行った。その結果、40名からの応募があり、

その内公演までのワークショップに参加し、出演に至った参加者は35名であった。出演者の男女比の内訳は男性7名、女性28名であり、参加者は9歳から54歳まで様々で、20代は46%と大半を占めていた。10代、20代の参加者の多くは学生で、中でも普段から美術や芸術など創作を学び、興味はあるが、身体表現を通して自らが出演することはほとんど、又は全くないという学生であった。高校生や大学生など若い人々が、世界で活躍する人の仕事を目の当たりしながら舞台を創ることは、実践的な経験となり普段では得難い貴重な機会である。

また、40代、50代の参加者は全体の約20%であったが、日々の職務とは離れたジャンルのワークショップに対しても積極的に取り組み、多くのものを得ようとするエネルギーを発揮し、ワークショップ全体の雰囲気牽引していた。

前述のように、「モーリ・マスク・ダンス」のワークショップはマスクや衣裳等を制作する創作ワークショップと、身体表現を主とするダンスワークショップの二つに区分される。

創作ワークショップで参加者が主に制作した物は、マスク3点、衣裳3着、灯籠1点である。これらの多くのマスクや衣裳は1回約3時間という限られたワークショップの時間内で制作しなければならない。そのため、パターン制作や、簡単な縫製を終えた制作キットを作った。これらの衣裳には大量の生地が必要となり山口県立大学生生活科学部の水谷教授や、ブルーエイ(株)の岡

	日時	場所	内容
第1回	4月15日 14時～17時	山口情報芸術センター スタジオC	モーリ・マスク・ダンスの映像鑑賞、マスクデザイン制作
第2回	5月27日 14時～17時	白石公民館 2階講堂	戯曲に基づきマスク、衣裳制作
第3回	6月24日 14時～17時	白石公民館 2階講堂	マスク、衣裳のデザイン制作(講評)
第4回	7月22日 14時～17時	スタジオ・レイ	マスク講評、衣裳(第2幕デニムブラウス)
第5回	7月23日 10時～15時	スタジオ・レイ	ダンス指導
第6回	8月18日 19時半～21時半	白石公民館 2階講堂	ダンス指導
第7回	8月19日 14時～17時	スタジオ・レイ	衣裳制作(小道具等)
第8回	8月20日 10時～13時	白石公民館 2階講堂	ダンス練習
第9回	9月9日 14時～17時	スタジオ・レイ	ダンス練習
第10回	10月2日 19時～21時	スタジオ・レイ	ダンス練習
第11回	10月16日 19時～21時	スタジオ・レイ	ダンス練習
第12回	10月23日 19時～21時	スタジオ・レイ	ダンス練習
第13回	10月28日 14時～17時	やまぐちリフレッシュパーク	ダンス練習ドレスリハーサル
第14回	10月29日 10時～15時	スタジオ・レイ	ダンス練習リハーサル・スタッフ総見

モーリ・マスク・ダンス ワークショップの日時、場所、内容

部氏の多大な協力を得て成すことが出来た。

4月に行われた第1回ワークショップでは、マスクを制作したが、筆者を含め、参加者はものを創る事や、これから始まろうとすることに戸惑い、真っ白な厚紙を前に硬直していた。しかし、芸術監督である毛利氏が軽やかな手つきで鋏を握り、マスクを創っていく姿を見ている内に、創造することへの臆病さが抜け、創る表現への柔軟性を得、表情も次第に柔和になってきた。この創作ワークショップでは時間の制限の他に、参加者の約42%が衣裳制作の経験がほとんどもしくは全くないという点を考慮しなければならなかった。高校生以下の参加者は保護者や指導者の協力もあり滞りなく進んだが、その他の参加者にはワークショップの日程以外に平日夜や土日に数人集い補講を行った。筆者は参加者の制作への姿勢の変化や、表現の成長を身近に見ることができ、刺激を受けることが多々あった。デニムを用いた衣裳では、プリーチやフリンジの技法、様々なモチーフや装飾を参加者が独自にアレンジし、同じデニム素材とパターンを用いたにも関わらず35人35様の全く異なる衣裳が出来上がるのを大変興味深く思った。

ダンスワークショップでは、参加者の49%がダンス・舞台等の身体表現経験がほとんどもしくは全くなかった。そんな中モーリ・マスク・ダンス Part12「BLUE MOON」に使用されたのは金大偉氏によって作曲された中国雲南省の少数民族納西（ナシ）族の民族音楽をベースとする楽曲であった。この音楽に対し、参加者には一定に刻まれるリズムに合わせる通常のダンスとは異なり、リズムに合わせないようというテーマが課せられた。

ダンス経験者にとっても困難だったというこのテーマに対し、殆ど身体表現の経験のない参加者達は困惑しながらも果敢に取り組み、ワークショップを重ねるごとに、音にとらわれない心からの身体表現について学んでいった。シーンによって付け替えられる様々な表情のマスクは表現を助け、また妨げた。それはマスクによって視界が狭くなることで、通常なら気に留めない足下の装置に躓く、隣との間隔が分かりにくいなどの点であった。しかし、その分周囲を気にせず表現する自己に没頭でき、周囲の環境を肌で察しようと敏感になる。マスクを被って表現する間、人々は老人にも、子供にも、男にも女にもそしてまか不思議な動物にも変化し、何者にも成ることができる。参加者はマスクを被ることで、自ら課した役柄を考え、その年齢や人柄、もしくは内なる自分を考慮し表現するのであ

る。

筆者はこれらのワークショップを運営しながら、人々の心が次第に開かれ、強くなってきているのを側で見て、感じていた。また、参加者一人一人が衣裳をデザインし、制作することを通して山口のデニム文化を発信しながら、デニムの様々な可能性について考え、刺激を受けた。そして何より、このワークショップに最後まで参加し、表現について挑む市民の活力を再確認し、一人一人が創造者になっていくことを実感した。

「モーリ・マスク・ダンス」のワークショップを通し筆者を含め、参加者一人一人が生活や仕事の中で「コラボレーション美学」を心の片隅に於きながら、この体験を活かすことから、新しい地域文化が創造されると考える。「モーリ・マスク・ダンス」という表現活動が、ワークショップによる山口市民とのコラボレーション(融合)によって今後、様々な広がりを見せる事を予感している。

以下では、永富とともに演出助手を担当し、同時に出演もした神大樹に今回の体験について語ってもらう。

③演出助手・出演者の立場から

モーリ・マスク・ダンスは出演者自らが衣裳や小道具を作るという形式の舞台であった。そのため出演者全員が舞台の表側だけでなく裏側を体験することができた。筆者は出演や衣裳・小道具制作だけではなく、制作のためのワークショップスタッフとして運営に携わり、演出助手として舞台演出を学び、裏方の仕事に関わることができた。

ワークショップはスタッフとして制作指導をする立場であったため、当日までに表現や技法の見本となる試作品や使用する部品などを制作し、当日は参加者たちの指導や補助を行った。筆者自身が指導を行うことは初めての体験であり、また参加者も衣裳を作ることがほぼ初めてという方が多く、限られた時間の中では困難なこともあった。しかし、それぞれの参加者が個性的なデザインを考え、独自に技法を考えて制作する方もおり、物を作ることに於いて最も大切なものは技術ではなく何を作りたいか、ということなのだと思えて感じる事ができた。できあがった衣裳や小道具は次回のワークショップで、毛利芸術監督に見てもらい評価や助言をもらい、本番当日までそれぞれが手を加え完成させていった。

パフォーマンスは、これまで舞台での表現の経験がほとんどない筆者にとってはとても難しいものだった。決められた動作と出演者自身が動作を考えるものがあったが、どちらも身体の動かし方が初めは難しかったが、

毛利芸術監督や振付のREI・KOさんの指導や助言のもと繰り返し練習し、少しずつ自分らしい動作を作っていくことができた。そして、そのパフォーマンスはマスクを付けることで変化していった。筆者を含めた出演者全員に言えることであるが、モーリ・マスク・ダンスのコンセプトにあるとおり、マスクを付けることで恥ずかしさやためらいが消え、本来の自分を出すことができ、表現に個性や感情が生まれてきたように感じる。

そして、本番に使用する舞台を使つてのリハーサルに入るとさらに変化が生まれた。実際の映像や照明などを使用してのパフォーマンスは、その演出効果によって出演者たちも舞台に引き込まれ、毛利芸術監督が作る世界の表現者となっていった。

本番は緊張というよりもその時間を純粋に楽しむことができた。舞台の上で楽しい祭りが行われたような感覚だった。そして喜怒哀楽が一気に通り過ぎたその祭りは客席にも伝播していたようであった。

8ヶ月にわたり一つの舞台を作りあげていったが、その間様々な経験ができたことは筆者にとってとても貴重なことであった。物を作る姿勢や舞台の専門的な知識や演出方法など、毛利芸術監督の身近で学ぶことができ、また、様々な個性を持った出演者や多くの関係者から学ぶことも多く、全てが刺激的だった。苦勞、楽しみ、感動といった、ものづくりの根元的なものを大きな衝撃と共に学んだ8ヶ月だった。

④記録資料として舞台の実施内容とスタッフ

日 時：平成18年11月10日（金）

1 回目公演17：30～ 2 回目公演19：30～

※いずれも30分前開場

会 場：山口情報芸術センター（YCAM）スタジオA

芸術監督（脚本・演出・美術）：毛利臣男

振 付：毛利臣男 REI・KO

音楽・映像：金 大偉

舞台監督・照明：倉田敏生

舞 台：いかわ さとる

音 響：亀井政一

演出助手：永富真子 神 大樹

振付助手：Kayo Mami 大脇理智

衣裳監督：水谷由美子

衣裳監督助手・衣裳制作：永富真子

衣裳制作：岡部泰民

衣裳制作指導：山野美智子 松尾量子

衣裳制作スタッフ：神 大樹 片山涼子 原口侑子

特別出演：我妻マリ 金 大偉

出演・衣裳制作：REI・KO Kayo Mami

榎本恭子 大脇理智 竹下玲子 長谷川仁郎

堀 浩 松田靖子 山下朱実 新井有美

荒瀬敦子 上野千恵子 岡本陽子 片山涼子

神 大樹 蒲地頼子 川西佑果 来島さえみ

久保美咲 坂本久実 末永光正 村本真智子

瀬戸琴美 田島美紀子 原口侑子 藤田美穂

正木尚子 松本朋子 鈴尾啓太 池田稔平

真田友希 鳥丸明依 西村美樹 野村ちさと

企画・制作：水谷 由美子

ワークショップ運営：有限会社ナルナセバ

協力：山口県立大学

京都造形芸術大学空間演出デザイン学科

中村女子高等学校

Studio Ray（リル・レイ・ダンススタジオ）

山口ミシンセンター 東レ株式会社

ブルーウエイ株式会社

萩竹紙の会メンバー

紙制作指導 石川 正一

大田史枝 河田直子 竹原加世美

土田キチ子 西嶋紀子

4) シンポジウム「シュル・ジャポニスム宣言ーデニムファッション！世界を翔るー」

ファッションフェスティバル全体のテーマである「シュル・ジャポニスム宣言ーデニムファッション！世界を翔るー」を、シンポジウムのテーマにしたのは、今回は当フェスティバルで実施した5つプロジェクトですすでに終了したものについて総括し、それらに参加したフロアとともに語り合いたいという理由からであった。

まず、基調講演では今回ファッションフェスティバルで芸術監督として関わってもらった毛利臣男氏に、70年代以来、世界のアートシーンにジャポニスムの風を吹かせた立役者の一人として、スーパー歌舞伎の衣裳やデザイン画および舞台の映像を交え、これまでの活動について語ってもらった。

また、その後のシンポジウムでは、以下のリストにある各パネリストにそれぞれの立場からジャポニスムについて考えて頂き、山口から発するシュル・ジャポニスムとは何かについて提言を受けた。最後にシュル・ジャポニスムを山口から創造し発信していくことを宣言して締めくくった。

②内容

日 時：平成18年11月11日（土） 16：00～18：00

会場：山口情報芸術センター（YCAM）スタジオ A
 <基調講演>

演題：「毛利の服」

スーパー歌舞伎の衣装たち

講師：毛利 臣男（アーティスト）

<シンポジウム>

【コーディネータ】水谷由美子（山口県立大学教授）

【パネリスト】

我妻マリ（ファッションクリエイター）

大鳥居幸男（ファッションデザイナー）

南目美輝（島根県立石見美術館主任学芸員）

岡部泰民（匠山泊代表）

協力：松竹株式会社、松竹衣裳株式会社、株式会社おもだか

5) ファッションデザイン・コンテスト Under18

日時：平成18年11月12日（日）13：00～14：30

会場：山口情報芸術センター（YCAM）スタジオ A
 デニム素材と全国各地の文化が融合した個性豊かな作品を課題にデザイン画を募集したところ、全国27都道府県、中・高等学校などから合わせて796点の応募があった。このうち一次審査を通過した20作品について、実物審査を行い優秀作品を決定した。

賞：

文部科学大臣賞 1名

国民文化祭実行委員会会長賞 1名

山口県知事賞 1名

第21回国民文化祭山口県実行委員会会長賞 1名

山口県議会議長賞 1名

山口県教育委員会教育長賞 1名

山口市長賞 1名

第21回国民文化祭山口市実行委員会会長賞 1名

山口市議会議長賞 1名

山口市教育委員会教育長賞 1名

ファッションフェスティバル推進委員会奨励賞 若干名

6) 第7回ジャパン・ファッションデザインコンテスト in 山口（国民文化祭連携事業）

日時：平成18年11月12日（日）14：40～17：00

会場：山口情報芸術センター（YCAM）スタジオ A

岡部は2000年から山口市で産業と文化の振興を目的とした、ジャパン・ファッションデザインコンテスト in 山口（以下JFDC）の実行委員長を務め、2002年からは山口県立大学大学院に入学し、ファッションデザイ

ンコンテストを通じた地域の産業と文化の振興についても研究して来た。そして指導教官の水谷教授とともに山口県立大学大学院論集（5号）において「ファッションと産学協同：「ジャパンファッションデザインコンテストIN山口」を発表し、自らが手掛けているファッションデザインコンテストを事例として分析している。

ここでは岡部によるファッションデザイン・コンテスト Under18の実施事例を検証する。

①ファッションデザイン・コンテスト Under18開催事例による考察

Under18の部門を設けた目的は、今回の国民文化祭の基本戦略となった「子ども達の文化環境づくり」の視点に立った時、近年、普通科高校の場合、デザイン・被服制作などの受験科目外の授業が少なく、クラブ活動でも事例がほとんどないような現状において、自己啓発し体験するための動機付けとなること。さらに、ファッションデザインは興味を持ち易い身近なデザインであり、多様な要素が要求され、総合的な創造体験になるためである。

実施にあたっての経過は、まず2006年3月に募集要項を作成した。4月には課題素材の提供協賛を企業に依頼し、国民文化祭の事業として各県の教育行政機関を通じて募集をした。7月にデザイン画を締め切り、1次デザイン画審査を東京にて実施、選考結果を通知した。10月末に作品提出を締め切り、写真とともに作品を送付してもらった。

応募の結果、27の都道府県から796作品の応募があった。その中から20作品を入選に選考し、実物制作のために提供デニムを送付した。

上述したが落選したデザイン画の中から優秀なものを50点選び、街じゅうデニムで展示した。

実物作品による最終審査会は11月12日に山口芸術情報センタースタジオ A で実施した。午前10時からゲネプロを実施し、午後1時からショー形式の公開審査会を実施した。上位10作品が国民文化祭において与えられる各賞を受賞し、その他の作品に当ファッションフェスティバルが奨励賞を与えた。

今回のUnder18の応募状況から、その傾向を検証してみる。

多数の応募が得られたことの要因は、国民文化祭のイベントであったことから審査料が無料で交通費補助、課題素材が無料提供されるという好条件であったこと、広報が自治体経由で全国の教育機関に伝達されたことがあげられる。

また、高校生及び18歳未満の個人を対象とした作品

制作とショー形式の公開審査会は地域限定やグループ制作が多く、デザイン画のみを対象としたコンテストが殆どであり、当該コンテストは極めて珍しいイベントであったことからデザイン課程をもつ実業系高校生の参加が目立った。山口県の作品について言えば、県内の作品と全国の作品ではレベル的に差が目立った。このことは山口県には、デザイン系の高等学校が少なく学校間に競い合う機会が少ないことに原因があると思われる。今後、さらに県内の高校生が我々が実施しているファッションデザインコンテスト等に気楽に応募する機会を増すことで、切磋琢磨する機会を得てほしい。

18歳未満対象のコンテストのメリットは、地域における身近な存在にコンテストの参加者がいることで、その者の家族や親族の関心が高くなり、地域的においてファッションに関する認識を変えることができること、また、参加者の専門領域への適性を量ることができるので、進路決定に役立つことがある。これは、従来実施して来たジャパン・ファッションデザインコンテストin山口において多くの例を持っている。全国的にデザイン系専門学校主催のコンテストが多いが、ここではより専門家への登竜門として機能を果たしている。

それとは逆に18歳未満対象のコンテストのデメリットは、生徒が自立していないために交通費、宿泊費そして素材費等が負担となる。また、高校生は進路が確定していないため、素材産業にとっては広報的な効果が小さい。それ故に、自治体やデザイン系教育団体主催、学校文化祭のコンテストは多いが、企業主催が殆どないことから判る。

以上のことから18歳未満のコンテストは地域、教育の面から考えていくことが現実的であり、そのためには学校の在り方が大学受験のための教育から、良質な社会人となるための教育に転換することが必要であると考えられる。今後の生活様式や産業での商品開発は、成熟の度合いを益々深めていくと思われるが、それを創造すべき人材の育成の対応が急務ではないだろうか。感性表現教育の重要性を認識して国際競争力のあるデザインを生み出すことが、産業及び地域力の強化につながり産業空洞化後の先進国としてあるべき姿と思われる。山口市の私学にライフデザイン課程が創設されることが決定した。この取り組みが社会的により影響を出してくれることを期待する。

4 「協働の精神」の発揮による文化創造への新たなチャレンジ

以下ではまとめの前に、ファッションフェスティバルが実施される背景として、第21回国民文化祭山口県実行委員会がどのようなコンセプトで、第21回国民文化祭・やまぐち2006を企画したのかを、事務局長の田中に語ってもらったので、以下に引用する。

「やまぐち発 心ときめく文化維新！今回のメインテーマである。このコンセプトには、国民文化祭やまぐちの開催を契機に21世紀の新たな文化の創造に果敢にチャレンジしていくという強い思いが込められている。

本県の歴史を振り返ると貴族社会から武家社会への転換となった「壇ノ浦の戦い」、近代社会の礎となった「明治維新」など我が国の歴史を大きく動かす転換期に、その舞台となっている。この流れを汲み、テーマの「文化維新」を成し遂げるためには、山口県の存在感を示し全国に誇れる国民文化祭の全国モデルと言われるような「新たな試みにチャレンジ」する必要がある。

これまでの開催手法は、一般的には先催例に習うことから準備を進め、県や市町が先行する行政主導型で進めているのが通例であった。しかしながら、本県の場合は国民文化祭での事業を一過性のイベントに終わらせないという目標を立てた。2001年のジャパンエキスポ「山口きらら博」で培われた成功ノウハウや県民力を活かし、今回も特に、自立・協働・循環をキーワードに2006年の国民文化祭が組み立てられた。

そして、今回の成果を2011年の「国民体育大会」へ繋げていくことが期待されている。これらの5年刻みで開催される全国規模の大型イベントを企画し、ポップ・ステップ・ジャンプで「住み良き日本一の元気県山口」の実現を図ることが、我々県国民文化祭実行委員会の使命であった。

このため、県づくりのキーワードの一つ「協働」をクローズアップさせ、1+1を2ではなく県民の英知を結集することで5にも6にもして、大きな成果を得る。この「協働の精神」を如何に発揮させるかがその正否を左右すると思えた。この精神を生かして本県の独自性を出すために、準備段階において先行事例にあまり拘らずに議論を進めた。

そして、自ら創り出し、県民参加による手作りを第一に産民公学が連携して進めることを目指した。これに加えて、近年、子ども達を取り巻く社会環境が著しく悪化している現状を踏まえて、「子ども達の文化環境づくり」を進めることを基本戦略として開催準備に着

手した。

この結果、全国初の取り組みとして、まず、国民文化祭の広報活動では、文化団体等が日頃の文化活動の中で自発的にPRする文化大使「文化維新おひろめ☆たい志」制度（登録認定数：807団体）を設けた。子ども達の文化環境づくりでは準備段階からワークショップを開催し、美術や文芸などの応募作品は、全国一位で17万2千点であった。それは子ども達が自ら考えた夢やアイデアを実現する「子ども夢プロジェクト」の29事業の実施を背景としている。

さらには、山口市の中心商店街で実施されたファッションフェスティバル「街じゅうデニムファッション&アートー」は街を劇場に見立て、多くの市民が参加した画期的な取り組みであり、また萩市の武家屋敷の中で展開された「陶芸展」などは地域文化を背景とした豊かな企画である。これらは共に山口県の独自性を発揮した取り組みであったと評価されている。

特に、ファッションフェスティバルは、まさに協働の精神の下で産民公学が連携し、文化と産業、地域が融合する模範例であり、県内はもとより他県からの視察者等からも注目を浴びたイベントであった。これまで先催県で開催されてきたファッションフェスティバルは、舞台上で練り広げられるファッションショーを鑑賞するいわゆる鑑賞型が多く見受けられ、デザイナーを中心に参加者も限られていた。本来、ファッションはデザイナーも着装する者も鑑賞する者も全てが創造者であり表現者であると思われる中で、国民文化祭・やまぐち2006では、まさにデザイナーと着装する者、鑑賞する者が、商店街という街中を舞台にして一体的に創造活動を展開したところに注目したい。

また、その素材も地場産業であるデニムを有効に活用するとともに、日頃はあまり文化的な活動に縁がない幼児から高齢者まで幅広い年齢層の県民がデニムアートの創造活動に多く参加した点にも注目し、高く評価したい。この成功の陰に、これまでファッション文化の研究発信をしてきた山口県立大学生活科学部、同大学院国際文化学研究所、ファッションデザイナーの養成・発掘に尽力してきたジャパン・ファッションデザインコンテストin山口実行委員会等の取り組みがあったことを忘れてはならない。

終わりに、平成18年11月3日から12日までの10日間「やまぐち発 心ときめく文化維新」をテーマに開催した第21回国民文化祭・やまぐち2006は、県民総参加による「山口県まるごと国民文化祭」として、県内各地を舞台に、全国初となる様々な取り組みを県民の皆様

と協働で進め、お陰をもって、目標を大きく上回る144万人を超える来場者を迎え、本県の優れた文化、元気と魅力を全国に向け発信することができた。県民の皆様から感謝を申し上げる。」

5 まとめ

以上、2004年から2年間に渡り準備をして来たファッションフェスティバルの企画について、そして2006年11月3日から12日まで実施された本番の内容について報告するとともに、そこでの意義や今後の課題について考えてみた。

会期前半の3連休に実施した「街じゅうデニムファッション&アートー」は、まさに本論のテーマとなる産民公学連携事業として大きな成果を上げることができた。改めて述べると、国民文化祭に対する全国の一般国民の認識は国民体育祭に比べて低く、ほとんどその存在を知られていない。開催されても、さほど大きな影響がない場合もある。

しかし、山口においては、文化活動に対する潜在的な参加欲求があり、国民文化祭に参加したい、楽しみたいという方が沢山いた。それは、普段の各分野ごとの企画とは異なり国民文化祭が半世紀に一度のイベントということに、特別な意味を見出しているからでもあった。

その結果、ファッションフェスティバルにおける街じゅうデニムでは多くの一般市民が参加し、地域上げのイベントとなった。

子ども会から老人会まで幅広い年齢層の市民が、一つのイベントで表現者として参加したということが最大の成果と言える。今後、このような流れを継続させて、山口市が自発的な文化発信の街になるよう活動をして行きたいと考える。

「日本の祭ー 藍とデニム／伝統と現代ー」展における「法被で表わす日本の祭」部門は、全国から非常に豊かで高度な法被作品が集まり、幸運にも神戸と益田にて巡回展示を実現することができた。法被を通じて我々のファッションに対する考え方が、持続的に山口から発信され続けることは非常に意義があることだ。

一方、地元からオリジナルな舞台作品を創作したものに「モーリ・マスク・ダンス」がある。これは、ファッションによるアート表現が求められて企画されたもので、地域の人々の創造力を高めることができる素晴らしい機会となった。経験者未経験がともに、そして小学生から50代の男女が、世界的に活躍する創造性豊かな毛利臣男芸術監督の下で、厳しい指導を受け、高い

レベルの作品を共同で制作するという機会を得たことは、国民文化祭の大きな贈り物である。

第7回ジャパン・ファッションデザイン・コンテスト in 山口とともに開催されたファッションデザイン・コンテスト Under18では、全国の若者から多くの参加を得た。

この場をお借りして、ファッションフェスティバルに参加して下さった多くの方々や支援して下さった関係諸機関等、さらに大量のデニムを惜しみなく提供して下さった企業の皆様に心よりお礼申し上げます。

最後に第21回国民文化祭山口市実行委員会ファッションフェスティバル推進委員会の推進委員を50音順に記す。阿部一直，入江幸江，河村 勉，岸 正人，河野通孝，末永光正，関谷公子，永富直樹，山野美智子，そして副委員長は岡部泰民，推進委員長は水谷由美子が担当した。さらに、事務局は国民文化祭推進室室長が中園隆行，運営リーダーに磯部素男そして運営スタッ

フに藤井和佳子が当たった。

ファッションフェスティバルは以上の委員とスタッフさらに各事業のワーキンググループのスタッフによる、自発的な行為によって成り立った。成果は参加されたすべての方の情熱と努力の賜である。この場をお借りして感謝を申し上げます。

1995年に街は劇場と題して「魔法の屋根」(商店街アーケード)の落成イベントを実施してから11年目に、街は市民劇場と銘打ってファッションフェスティバルを実施することになった。そして、商店街と大学、市民が一体となった事業が実現したことはこの上ない喜びである。

今後、継続していこうという流れがあるので、また新たな組織を構築して、山口が文化・芸術の発信力がすぐれていることを、専門家と同時に市民とともに内外に発信していきたいと考える。

「街じゅうデニム - ファッション&アート -」マップ

第21回国民文化祭・やまぐち2006ファッションフェスティバル 街じゅうデニム - ファッション&アート -

2006.11.3~5

「街じゅうデニム」に展示された作品や衣装は、展示場のみならず市内の老人クラブや子ども会、商店や大学など、1000人を超える方の協力によって実現しました。

街じゅうデニムとは?
山口は日本におけるデニム製造生産の一大拠点です。「街じゅうデニム」は、これまでのファッションという枠にとらわれず、デニムを生かした独自の創造的なファッション文化を、学生公選展に加え、山口市日本橋に、そして世界に発信しようとするものです。特に、高度な技術的な「モノ」と「情緒」そして多様な「交流」が生まれる場所、山口の商店街と大内町の時代を今に伝える山口市文化センターが、近世において定期市として栄え現代に続く歴史があります。街じゅうデニムでは、こうした歴史の流れを背景として、商店街を古代、中世、現代・未来のエリアに分け、デニムを使った作品や衣装でそれぞれの時代を表現します。

フォト&デニム (どうもん広場)
デニムファッションの写真コンテスト。市民のみならず応募されたデニムファッションの写真を展覧します。応募作品の人数コンテストを募集し、大賞1点、入賞10点を決定します。みなさんの投票を待ちしています。(10:00 - 16:30)
※投票用紙は、各投票箱100枚配布

まちようちん飾り (道場前前)
やまぐちの代表的な祭りである「まちようちんまつり」を再現。歴史あるオープンブランドをほしめ、全国からの来場者へ山口文化をアピール。山口で育ち育ってきた伝統のよさを、全国に紹介します。

キッズ&デニム (新町)
市内の幼稚園・保育園児、総数約400人に参加してもらい、タペストリーにして新町の通りを飾ります。

デニム人間 (商店街各所)
100人のデニム人間が、古代、中世、現代・未来のイメージをデザインされたデニムの衣装を身に付けて商店街を歩きます。コスプレの無料配布やおもてなし、清掃活動、イベント開催やウォーマンスを行います。

ゲート&デニム
デニムを穿し込んだゲートと、デニム人間のデニムゲートの両端にお客様をお迎えします。

デニムロード (商店街アーケード内)
商店街を舞台に、デニムのオブジェで時の流れを表現します。市街を古代、未来街を併せ、そして、選挙権を得た、若者に立って、それぞれの時代を表現した種、書、絵のオブジェを展示します。
●本舗 増設室内 (KOMEX広場) ●みずほ銀行前 ●カピタル画廊 500年記念「カピタル」のデニスツーカー 1000部限定 ●1100 - 近くまで次期終了

デニムデザイン画展示 (西門前)
ファッションデザイン・コンテスト Under18の応募作品約800点のデザイン画から直轄作品50点を展示

メッセージ&デニム (道場前前・旧丸広前)
街じゅうデニムに穿り込んだボランティアの方や関係者・スタッフが約1000人が各自メッセージを書き込み、市民参加の結果を展示します。

パフォーマンス&デニム (どうもん広場・みずほ銀行前広場・Nac前広場)
3つの広場でイベント会場とし、二城演舞のほか、ジャンル異なるパフォーマンス展示も、よさこい唄やダンスなどのパフォーマンスを行います。
●音楽アーティスト POKU (バウテン) moka (モカ) color (カラー) ほか (よさこい) ●舞踊パフォーマンス 舞踊家・舞踊家
●新しいパフォーマンス、準備中です。

コサージュ&デニム (配布:商店街各所・展示:旧Tshop内)
老人クラブ等多くの市民のみならず、一般の方でもワークショップを随時、3000個のデニムのコサージュが出来ました。このコサージュを無償配布します。
●ワークショップ日時 毎日10:00以降

水墨画&デニム / デニム de やまぐち (米屋町)
アーケードのバーに展示 (クマ 1.5x3.0x2m)
商店街(米屋町)内のバー12本を利用して、水墨画デニム9作品、デニムdeやまぐち12作品を展示します。

デザイン&デニム (商店街全域)
街じゅうデニムのイベント案内や商店街の案内など、観光客の目撃がそれぞれに工夫した手づくりのサインが設置します。
●水墨画デニム 県立美術館で行われる展覧場に園内で、香舟の代表作「四郎山来園」(山水長巻)の一部を複製。市内の高校や大学が参加し、デニム生地をサンドパーパーなどで着て絵を塗りました。
●デニム de やまぐち 市内の手ごめ島島島、地域の特色ある肌質や巾着の生地を身に付けてみました。
●デニムエンディング体験 水墨画デニムの字書き、エンディング作り、第一と山根和氏の指導で、あなただけ体験できます。その際、デニムエンディングのデモンストレーション など
●水墨画複製 (無料) ※お問い合わせは、電話083-926-1111

Nac イベントブース
11月 11:00 - 3:00 開催 (1F:100円)
●「日本の情 銀とデニム / 伝統と時代」展 -制作「デニム」に穿き込まれた日本の情- 日本発祥の約80歳の歴史をイラストしたデニムの背景展。そのほか、歴史ある展示や山口の観光など、

山口駅前
●「コサージュ作りワークショップ」のご案内

山口駅前



写真1 街じゅうデニム 市民とのコサージュ制作



写真2 コサージュ展示会場（道場門前Tショップ）



写真3 展示会場でのコサージュ&デニム制作体験



写真4 商店街（米屋町）での展示



写真5 子ども会による制作

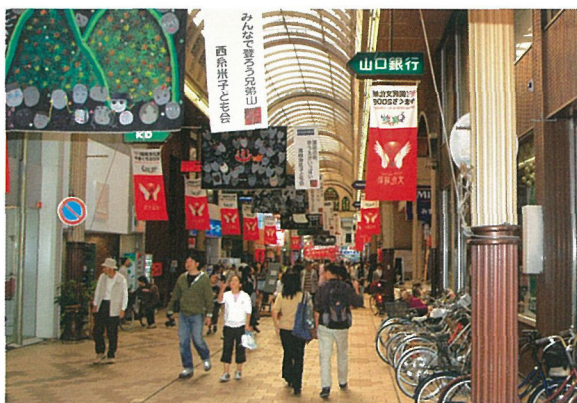


写真6 商店街（米屋町）での展示



写真7 どうもん広場（道場門前）での応募作品の展示



写真8 現代・未来エリアの”木”



写真9 道場門前（西側）のゲート&デニム



写真10 FOLLIBAのパフォーマンス



写真11 moorの演奏



写真12 colorfulのダンス



写真13 奄美連合萩組の踊り



写真14 Miki演奏



写真15 雪舟ミニレクチャー



写真16 デニムエッチング体験



写真17 デニム人間（四神）



写真18 デニム人間のパレード



写真19 ちょうちん飾り



写真20 デザイン画展示 (西門前)



写真21 メッセージ&デニム展示 (道場門前)



写真22 サイン&デニム展示 (駅通りほか)



写真23 デニム de どうもん (道場門前)



写真24 キッズ&デニム (新町)



写真25 日本の祭 展示風景 (N a c) 1



写真26 展示風景 (N a c) 2



写真27 県立大学の作品



写真28 企業展示 1



写真29 企業展示 2



写真30 神戸ファッション美術館での巡回展 (展示風景)



写真31 モーリ・マスク・ダンス ワークショップ(マスク製作)



写真32 ワークショップ (振り付け)



写真33 モーリ・マスク・ダンス 本番風景 (1幕)



写真34 本番風景 (2幕)



写真35 本番風景 (3幕)



写真36 本番風景 (3幕)



写真37 本番風景（3幕）



写真38 本番風景（特別出演者）



写真39 本番風景（フィナーレ）

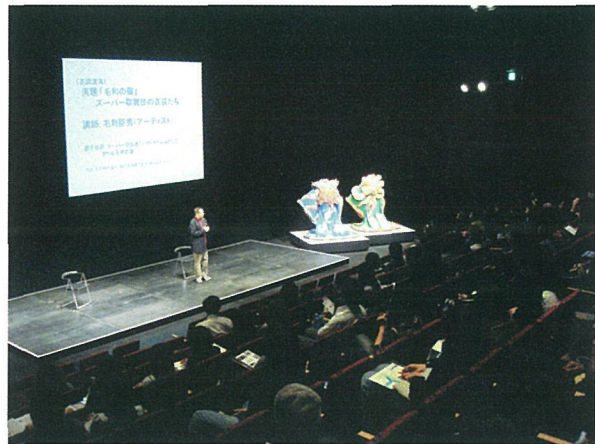


写真40 毛利臣男氏基調講演



写真41 シンポジウム



写真42 ファッションデザイン・コンテスト風景



写真43 Under18文部科学大臣賞作品

図1

法被サイズ

着丈 85cm
肩幅 34cm
袖幅 33cm
前幅 24cm
袖丈 27cm
衿幅 5.5cm
衿肩あき 10cm (裁ち切り)

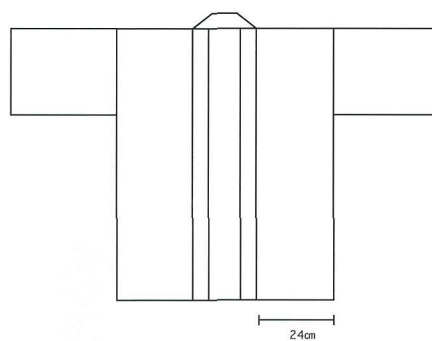
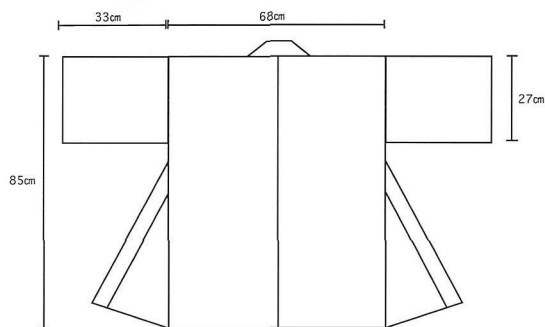


図2

